



総合型地域スポーツクラブ



平成23年度 公益財団法人日本体育協会

クラブマネジメント指導者海外研修事業 報告書

2011 Japan Sports Association
Club Manager Training Project



スポーツ振興くじ助成事業



平成23年度公益財団法人日本体育協会 クラブマネジメント指導者海外研修事業 報告書

○もくじ

団長総括「ドイツで感じ、学んだこと」……	2
派遣団名簿……………	4
派遣日程表……………	6
派遣先マップ……………	8
Ⅰ 講義概要……………	9
Ⅱ クラブ視察……………	27
Ⅲ 団員レポート……………	39
Ⅳ 派遣事務報告……………	71
フォトスナップ……………	77

「ドイツで感じ、学んだこと」

日本派遣団 団長 伊端隆康

総合型地域スポーツクラブ全国協議会 副幹事長
るもいスポーツクラブ「このゆびとまれ」クラブマネージャー

研修で感じたこと

- 1 地域に役立つ活動をしなければスポーツクラブへの行政支援は期待できない。
 - 2 スポーツクラブは地域コミュニティと結びつくと強みを発揮する。
 - 3 スポーツクラブが事業の幅を広げるとき、学校との連携は避けて通れない。
 - 4 スポーツクラブのサロンの機能は高齢者福祉に活用できる。
 - 5 スポーツクラブを発展させるなら地域の様々な団体や企業との連携は不可欠。ネットワークの確立で基盤は強化される。
 - 6 健康増進の機会提供はニーズにかなう。
- 以上のことをドイツ研修で感じ取った。

ドイツだって悩んでいる

風土、環境、学校制度の違う国から何を学ぶ？本当にスポーツクラブの先進地か？旅立つ前の私はドイツに懐疑的だった。

事前研修会で予備知識を蓄え、出発前から「ドイツを知った気分」になっていたことも新鮮味をなくしていた。

研修、視察したのは特定の地域であるため、ドイツ全体を語ることはできないが「ドイツも悩んでいる」と感じた。学校のシステムが半日制から全日制に変わり、新しいクラブのあり方、仕組みづくりに試行錯誤している印象を受けた。

日本のクラブも深刻さの度合いに差こそあれ、ヒト、モノ、カネの悩みは尽きない。目の前の壁をどう乗り越えるか、スポーツクラブのマネジメントは、そう簡単ではない。

150年以上の歴史を誇るドイツのクラブですら、目まぐるしく変化する社会情勢の中で悩んでいるのだから、日本のクラブも「悩みはつきもの」と

考えたほうがいい。

クラブにプライド

視察したクラブの役員は高齢者が多く、クラブハウスは社交の場だった。

クラブの役員は総じて身体が大きく（ドイツ人はみな大きい？）握手した手が分厚く、表情に自信がみなぎり、自らの活動を紹介する口調にプライドがあった。

クラブと行政はパートナー

研修地は財政難で、補助金の割合は下がっていたが、行政がしっかりスポーツを支援する仕組みがあった。

ドイツの行政はクラブを上から目線で見ていなかった、と感じた（ここは日本と大きな違い）。パートナーシップが築かれているから行政担当者やクラブ員の言葉の中に「相互信頼」があった。

お上にすがらず、お上を信用する。自主自立の精神が根付いているのだろう。行政批判ばかりしている日本では考えられないことだった。

ハプニングとアクシデント

ここでちょっと私事。恥ずかしい話だが、ドイツの旅は出足からこけ、えらい目にあった。出発直前、重いスーツケースの滑車が壊れ、腕の筋肉を鍛える旅になった。

毎朝ウォーキングをしたが、ホテル前の段差につまずき、手と膝をしたたか打った。

出国ゲートで写真を撮っていたら美しい外国人女性に叱責された。表情と身ぶりから「写真を撮っちゃダメ。決まりを守りなさい。あきれちゃうわ」ということらしい。冷たい目線が私の体に突き刺さり、顔から火が出るほど恥ずかしかった。

帰りの飛行機に乗り込む直前、財布のないこと



TUSグレーベンプロイヒのクラブハウスで



オルケン体操クラブの陽気な役員と「ピース」

に気づき青ざめた。派遣団の仲間が売店の前に落ちているのを見つけてくれ、事なきを得たが、振り返れば私はまるで「おのぼりさん」だった。

でも、5泊7日の旅は、小さなアクシデントとハプニングが加わったことで、より忘れられないものになった。

何をすべきか

閑話休題。ドイツのスポーツシステムをそっくりまねることはできない。そもそも無理がある。でも、講義と視察の中にヒントはちりばめられていた。

福島大学の黒須充教授は「ドイツのクラブは社会の発展に貢献することがミッション」と事前研修会で説明してくれたが、今回の旅では、まさにそのことを実感させられた。

ちょうど日本ではスポーツ基本法が施行され、総合型地域スポーツクラブにとっては同法第21条の推進、すなわち国や地方自治体によるスポーツクラブ支援が努力義務となる中、「地域の課題解決に役立つ取り組み」は重要なテーマとなっている。

そのことをどう具現化するか。今回の研修がクラブマネジャーのマネジメント力をつける旅なら、私たちは他の模範となるよう、その実践に挑み、いささかでも貢献すべきと考える。

先を見据えて

近未来のクラブの姿を思い描き、その夢や理想に近づけるため、ドイツだけでなく日本国内の他のクラブも見習いながら、クラブの骨格を形成することが肝要だろう。

まずは日本の近未来の姿を探り、イメージーションを働かせ、クラブのあり方を研究してはど

うか。

10年後は？

例えば10年後のことを考えてみる。

- ・スポーツ基本法第21条は推進されたか
- ・行政機関はスリム化したか
- ・どんな業種の企業が力をつけたか
- ・シャッター通り商店街は再生したか
- ・農業の自由化は進んだか
- ・人口動態はどう変化しているか
- ・70歳を過ぎても働いているか
- ・学校の体制は現状のままか
- ・スポーツで生活できる環境は整ったか

以上のことを分析しただけでもクラブのあり方は変わってくる。

そこで何ができるか。例えば下記のようなことが現実的な検討課題になるかもしれない。

- ・クラブでの高齢者サロン機能の充実
- ・地域産業と連携したクラブ運営
- ・アスリートの雇用につながるクラブ経営
- ・学校とクラブの連携強化

原点は地域密着

ともあれ、スポーツクラブは「地域密着」が原点。すべては、そこに住む人々のスポーツ環境が向上するよう誠実に取り組むことから始まる。ドイツ研修は、そんなことを気づかせてくれた旅でもあった。

終わりに、この事業を企画、運営、サポートして下さった公益財団法人日本体育協会、日本スポーツ振興センターに深く感謝し、現地で心温まるもてなしと誠実な説明をしてくれたアクセル・ベッカー氏はじめ多くの関係者に心をこめて「ダンケ・シェーン」

平成23年度

公益財団法人日本体育協会クラブマネジメント 指導者海外研修事業 派遣団員名簿



団長

いばた たかやす
伊端 隆康

所属：総合型地域スポーツクラブ
全国協議会／るもいスポー
ツクラブ「このゆびとまれ」
役職：副幹事長／クラブマネジャー
クラブ所在地：北海道留萌市
資格：公認クラブマネジャー



総務

さ の しゅんすけ
佐野 俊輔

所属：公益財団法人日本体育協会
クラブ支援課
役職：主事
所在地：東京都渋谷区



団員

むろや ほうぶん
室矢 法文

所属：NPO法人十勝サーカス
役職：クラブマネジャー
クラブ所在地：北海道音更町
資格：公認アシスタントマネジャー



団員

むらおか あきまさ
村岡 明正

所属：ニツッキミマチスポーツクラブ
役職：理事(アシスタントマネジャー)
クラブ所在地：秋田県能代市
資格：公認アシスタントマネジャー



団員

あいかわ まさひろ
愛川 政弘

所属：浜通り広域スポーツセンター
役職：チーフマネジャー
所在地：福島県富岡町
(仮事務所：福島県いわき市)
資格：公認アシスタントマネジャー



団員

いちのせ まさのり
一ノ瀬 正範

所属：ただみコミュニティークラブ
役職：クラブマネジャー
クラブ所在地：福島県只見町
資格：公認アシスタントマネジャー



団員

もろた みつお
茂呂田 光男

所属：スポーツクラブYOU GO!
役職：クラブマネジャー
クラブ所在地：栃木県日光市
資格：公認アシスタントマネジャー



団員

やざわ としおみ
矢澤 敏臣

所属：昭島くじらスポーツクラブ
役職：クラブマネジャー
クラブ所在地：東京都昭島市
資格：公認アシスタントマネジャー



団員

しもざわ ひろよし
下澤 弘嘉

所属：白馬総合型地域スポーツクラブ
役職：会長（兼クラブマネジャー）
クラブ所在地：長野県白馬村
資格：公認アシスタントマネジャー



団員

すぎやま かつひで
杉山 克秀

所属：総合型地域スポーツクラブ「TAC」
役職：理事、代表指導者、マネジャー
クラブ所在地：静岡県富士市
資格：公認クラブマネジャー



団員

まえだ あきら
前田 晃

所属：網野スポーツクラブ
役職：クラブマネジャー
クラブ所在地：京都府京丹後市
資格：公認アシスタントマネジャー



団員

かわさき かのり
川崎 香織

所属：NPO法人川西スポーツクラブ
役職：理事・会計
クラブ所在地：奈良県川西町
資格：公認クラブマネジャー



団員

かなやま えみこ
金山 恵美子

所属：NPO法人SPORTIVO ひがしいずも
役職：理事・クラブマネジャー
クラブ所在地：島根県松江市
資格：公認クラブマネジャー



団員

わかふじ みき
若藤 美紀

所属：清流クラブ池川
役職：ゼネラルマネジャー
クラブ所在地：高知県仁淀川町
資格：公認アシスタントマネジャー



団員

じょうの かずのり
城野 和則

所属：南関すこやかスポーツクラブ
役職：クラブアドバイザー
クラブ所在地：熊本県南関町
資格：公認アシスタントマネジャー

● 事業協力者 ●

多田 茂 (通訳)

松尾喜文 (通訳)

平成23年度

公益財団法人日本体育協会クラブマネジメント 指導者海外研修事業 日程表

日付	訪問地	時間	プログラム内容
10月17日 (月)	岸記念体育会館	15:00~16:30	最終打合せ・結団式
		16:40	成田市へ移動
	成田	17:50	成田ポートホテル着
		18:30	夕食
10月18日 (火)	成田	07:15	成田国際空港へ移動
		07:30	成田国際空港着
	フランクフルト	09:30	ルフトハンザ航空711便にてフランクフルト国際空港へ
		14:20	フランクフルト国際空港着
	デュッセルドルフ	16:40	ルフトハンザ航空082便にてデュッセルドルフ国際空港へ
		17:25	デュッセルドルフ国際空港着
	グレーベンプロイヒ	18:00	グレーベンプロイヒへ移動
		18:50	Hotel Sonderfeld着
20:00	夕食		
10月19日 (水)	グレーベンプロイヒ	09:10~10:45	【講義①】 「社会の発展とスポーツ」 ーポスト工業化社会でのスポーツー ーポスト工業化社会でのスポーツとスポーツクラブの役割ー 講師：ケルンスポーツ大学 特任教授 フォルカー・リットナー氏
		11:00~12:25	【講義②】 「ライン・ノイス郡のスポーツ」 ードイツスポーツのシステムー ーライン・ノイス郡のスポーツとスポーツ振興ー 講師：ライン・ノイス郡スポーツ相談課 アクセル・ベッカー氏
	12:30~13:15	昼食	
	13:20	コルシェンプロイヒへバスで移動	
	コルシェンプロイヒ	14:10~15:45	【講義③】 「自治体のスポーツ振興」 講師：コルシェンプロイヒ市スポーツ課長 ハンス・ペータ・バルター氏
		15:55	クライネンプロイヒへバスで移動
	クライネンプロイヒ	16:20~18:00	【クラブ視察①】 「コルシェンプロイヒ シニア世代スポーツクラブ」 ークラブ活動ー ークラブプレゼンテーションー ー理事との懇親ー
		18:10	ドイツボーリング (ケーゲル)・夕食懇親会
10月20日 (木)	グレーベンプロイヒ	09:00~09:45	【表敬訪問】 ライン・ノイス郡 副郡長 シュタイン・メッツ氏 ライン・ノイス郡スポーツ連盟 理事長 トーマス・ラング氏 在デュッセルドルフ日本総領事館 首席領事 相馬 安行氏
		09:55~11:15	【講義④】 「スポーツクラブの健康志向コース」 ー健康志向のプログラム・コース提供についてー 講師：ライン・ノイス郡スポーツ相談課 アクセル・ベッカー氏
		11:25~12:25	【講義⑤】 「スポーツクラブと小学校の連携」 講師：ライン・ノイス郡 学校スポーツ委員会事務局長 ギーセラ・フーク女史

※時間はすべて現地時間

日付	訪問地	時間	プログラム内容
10月20日 (木)	グレーベンプロイヒ	12:30~13:20	昼食
		13:30~14:30	【講義⑥】 「クラブマネジメント」 ー現在の傾向・成長ー クラブの現場実務ー 講師：ノイス市スポーツ連盟事務局長 ゲスタ・ミュラー氏
		15:00~17:00	【クラブ視察②】 「TUSグレーベンプロイヒ」 ーサッカー部門訪問ー ーユース育成コンセプトー
		18:00	【クラブ視察③】 「オルケン体操クラブ」 ークラブ活動体験ー ー理事との懇談ー 引き続き夕食懇親会
10月21日 (金)	ドルマーゲン	09:00~10:20	【クラブ視察④】 「TSVバイヤードルマーゲン」 ークラブと施設についてー ー仕事への適正ー 講師：TSVバイヤードルマーゲン アクセル・ヴェルツ氏
		10:20~12:05	【講義⑦】 「学校とスポーツクラブについて」 ー将来の挑戦ー ードルマーゲンにおける学校と競技スポーツの連携システムー 講師：TSVバイヤードルマーゲン ハンス・ペータ・ケーニッヒ氏
		12:10~13:10	昼食
	ノイス	13:30	ノイスへ移動
		14:00~16:30	【クラブ視察⑤】 「BVヴェックホーフェン」 講師：BVヴェックホーフェン理事長、 ライン・ノイス郡スポーツ連盟理事長 トーマス・ラング氏
	グレーベンプロイヒ	19:00~	答礼夕食会
10月22日 (土)	ケルン	09:00	ケルンへ移動
		10:15~12:15	ケルンスポーツ大学施設見学
		13:30~14:30	昼食
		14:30~17:00	ケルン市内見学
		17:00	デュッセルドルフへ移動
		18:20	Madison Hotel Düsseldorf着
		19:00	夕食
10月23日 (日)	デュッセルドルフ	07:45	デュッセルドルフ国際空港へ移動
		08:00	デュッセルドルフ国際空港着
	フランクフルト	10:20	ルフトハンザ航空077便にてフランクフルト国際空港へ
		12:30	フランクフルト国際空港着
	13:40	ルフトハンザ航空710便にて成田国際空港へ	
10月24日 (月)	成田市	07:45	成田国際空港着
			解散



派遣先MAP

Bundesrepublik Deutschland
Land Nordrhein-Westfalen

ドイツ連邦共和国



ノルトライン・ヴェストファーレン州





I 講義概要

社会の発展とスポーツ

—ポスト工業化社会でのスポーツ—

—ポスト工業化社会でのスポーツとスポーツクラブの役割—

講師：フォルカー・リットナー氏（ケルンスポーツ大学 特任教授）

現代スポーツの構造的変化

近年のスポーツは、スポーツブームや健康ブームに伴って、各種多様に変化している。これは、グローバル化、個人主義化、疾病パノラマの変化、人口ピラミッドの変化といった現代社会の構造的な問題とも深く関係しており、それら諸問題を解決する社会的役割を担うスポーツクラブは、必要不可欠な存在である。

ケルン市を対象とした調査研究

市と市の発展にとって、スポーツはどのような意味を持っているか。また、スポーツ政策を創造的にイノベーションに富んだものにしていくためには、どのような手段とコンセプトが必要か。そして、どうすれば将来性のあるスポーツ政策を展開できるのか。これらの問題について、ケルン市を対象に市民アンケート・クラブアンケートを実施し、スポーツクラブがもつ具体的な可能性を考察した。

まず、スポーツクラブは社会資本を生み出す中心的なプレーヤーであり、①社会への統合、②健康／予防、③市民の社会参加、④生活の質という点について、有為なものであるが、①スポーツに対する欲求の個性化・多元化、②自己組織的スポーツ活動との競合、③商業的スポーツ（フィットネス）との競合、等により、組織力の点においても、その存在理由においても、これまでドイツで独占的であった地位を失いつつある。

組織としてスポーツクラブが学習していかねばならないことは、①変化した需要要求に適切していくこと、②提供するサービス・プログラムを開発していくこと、③組織及びスタッフの発展の必要不可欠性を認識すること、④クラブ運営に



講師：フォルカー・リットナー氏

における専門性の必要性を認識することである。

将来の展望としては、スポーツと運動のネットワークを構築していくことであり、それぞれがネットワークにおける協力パートナーとして結ばれていくことで、多様なスポーツモデルの文化が形成され、全市民にスポーツが開放されるといえる（図1参照）。

命題

- ①ポスト工業社会にあつては、スポーツが必要不可欠な社会政治的な機能を受け持つ。現代スポーツの目に見える多くの変化は、生活の質とスポーツとの関係の根本的な変化を表すものである。
- ②スポーツクラブが社会資本を生み出す中心的な力の源になる。このことはまさに、ポスト工業社会にあつて速度を速めて現れる社会的変化と統合の問題に関して重要となる。
- ③福祉的向上に資するスポーツクラブの必要不可欠な貢献が、特に次の5つの領域に認められる。
 - i) 個人の存在の意味を発見する手助けをする
 - ii) 社会的な統合と社会化の実現を助ける

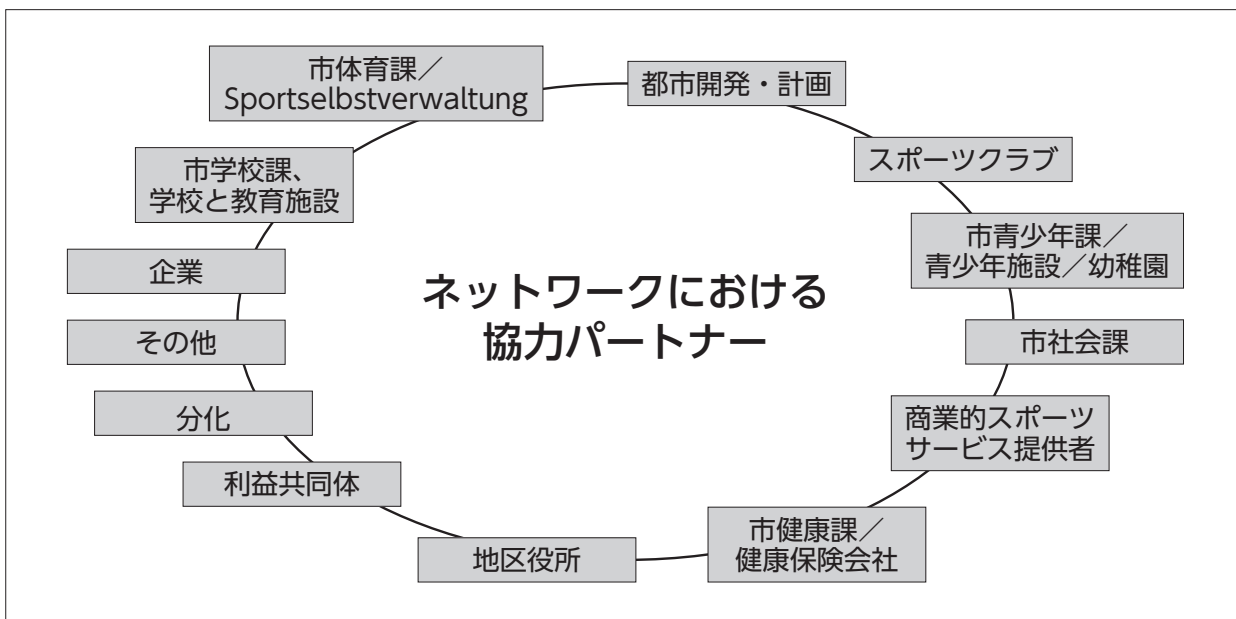


図1 地域における協力可能性の構築

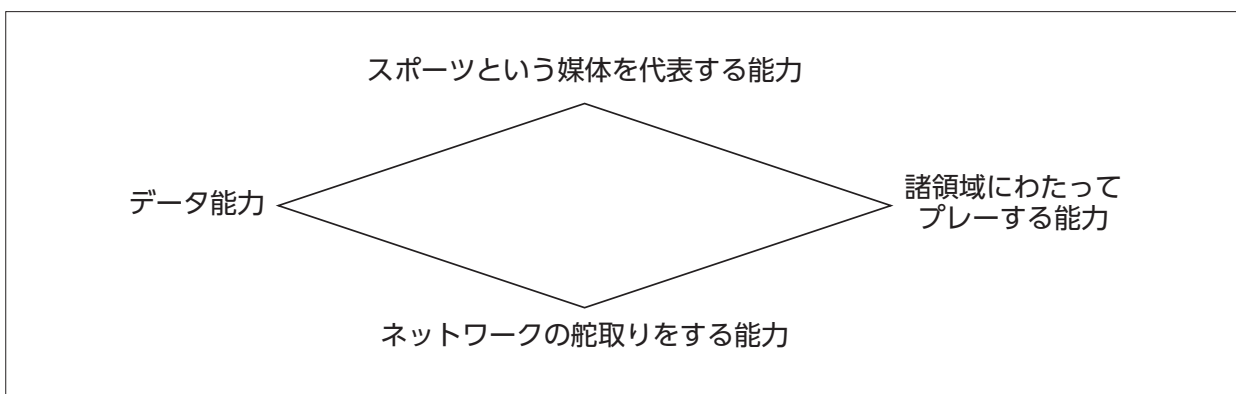


図2 魔法の四角形

- iii) 健康の増進を助ける
- iv) 人々が自分のライフスタイルを発見し、自己認識をする助けとなる。
- v) 市民社会における市民参加とボランティア活動を促進する。
- ④ スポーツクラブは組織としての学習を通して、変動する環境世界に対応していくための自分の能力を高めていかなければならない。
- ⑤ ネットワークを構築することは、スポーツクラブ及び地域社会にあってスポーツの発展を活性化するために最も重要な端緒となる。
- ⑥ スポーツ及びスポーツクラブの発展を新たに独

- 占的に舵取りしていくためには、そのための能力と専門性が前提になる。少なくとも地域において組織として学習を進めていくための「魔法の四角形」を構成する4つの能力が必要になる。(図2参照)
- ⑦ ポスト工業社会の諸問題に関連して、スポーツとスポーツ組織が持っている統合の能力、福祉的能力に対する期待が今後組織的体系的に増大するであろうこと、これについては疑いの余地がない。

【報告：室矢 法文】

ライン・ノイス郡のスポーツ

—ドイツスポーツのシステム—

—ライン・ノイス郡のスポーツとスポーツ振興—

講師：アクセル・ベッカー氏（ライン・ノイス郡スポーツ相談課）

□アクセル・ベッカー氏 あいさつ

ケルンスポーツ大学卒業前に、リットナー氏と共同でスポーツに関する調査をライン・ノイス郡を舞台に行った。大学卒業後、ライン・ノイス郡に勤めて23年になり、スポーツクラブとも長年お付き合いがある。

1 ドイツのスポーツシステム

ライン・ノイス郡は大きな都市、資金力のある大きなクラブに囲まれており、人口も多い。スポーツの組織を家に例えると、一番基礎にあるのは国民（市民）である。ただ、社会は少子高齢化の中にある。潜在的な人々の数が減っているということは、スポーツクラブにとっては一つの脅威になっている。また、経済的な状況も変わってきており、クラブの財政的な問題も起きてきている。

ドイツの憲法である基本法には、国民は誰でもクラブを作る権利があると記されている。つまり、クラブがいかに重要視されているかが分かるとともに、ライン・ノイス郡の中では1847年頃から積み上げてきた長い歴史がある。

クラブ名に表記されている「eV」とは、法律として保証されていることを示しており、非営利の会社のようなもので、運営にはボランティアが多く関わっている。また、クラブには税がかからないという特典もある。クラブを運営するにあたり、どのように運営していくかというマネジメントが重要になり、顧客である会員が何を希望しているのか、そのニーズがどのように変わってきているのか、どうそのニーズに対応していくのが大切になってくる。

ライン・ノイス郡の人口は約44万人で、クラブ数が356、会員が12万5,000人ほどである。クラブに属さずスポーツする人も15万人ほどいるという



講師：アクセル・ベッカー氏

調査結果も出ている。

ライン・ノイス郡はケルン市と比較すると、商業的施設は少ない環境にあり、ライン・ノイス郡のスポーツクラブはその分市民のニーズに对应している、満たしているということが言える。会員数の増は、ほぼ頭打ち状態にあり、将来的には減少を心配している。小規模なクラブ（300人以下）が大部分で、全体の73.2%を占めている。会員数が減少している小さなクラブには、統合したクラブ運営に向けた支援をしている。

クラブの役職に就く方はボランティアがほとんどで、そういう方を見つけることも大きな課題となっている。ここには、社会全体の変化で自分のことは自分で自由という個人化が進んでいることが影響していると考えられる。ボランティアで職を務めてくれる方を見つけるのは、日本でも同様に難しいことではないかと思われる。まして、組織が大きければ見つかりやすいが、専門的な知識・能力を有する人、時間的に許される人という条件を満たすことが求められるので、益々難しい状況にある。

ライン・ノイス郡には、約4,500人のライセンスを持った指導者、約150人の専任マネジャー・

コーチがいる。

ボランティアを引き受ける理由は、例えば祖父の時代から続く伝統や、活動に楽しみがあるからという最も重要な点があげられる。これらの動機は、クラブ側にとって協力してもらう時に大きな要素となる。ニーズに応えるだけでなく、運営に参加してもらえるようなクラブづくり、会員の関心をしっかり把握して会員が楽しんでもらえるようなクラブづくりが必要になってくると思われる。

クラブが抱えている課題として、自発的な会員、自発的に運営に関わってくれる会員の確保が難しいということがあげられる。

スポーツクラブの上部組織としてスポーツ連盟があるが、ドイツのスポーツ界の組織を家に例えると支えがないと上層部まで傾く恐れがあるので、支柱として町や郡の行政がしっかりと支えている。財政的支援が無くなれば、日本のクラブ同様、ドイツのクラブも存続が難しくなると考えている。スポーツ連盟では、指導者養成も行っている。財政的に見ると、支出として一番大きいのは人件費で、全体で220,000€になり、収入を考えると赤字傾向にある。そのためクラブとしては、財源を捻出していくため収益活動を行う必要性がある。郡としてスポーツシステムの家を安定させるためにできることとしては、スポーツ連盟に郡より100,000€の補助金収入があるということと、各クラブに約300,000€ほどの補助金収入がある点である。各組織が連携・協力して全体的に機能していくためには、各クラブは、自分たちの意志に基づいて活動する（自立の原理）ことが求められる。ただ、クラブが完全に自立できるわけではないので、クラブだけでは解決できない部分を、上部組織である行政が補う部分が大切になり、パートナーとして維持していくことが大切になる。

2 将来に向けた課題

- (1) 全日制導入により、学校施設を午後4時、5時まで学校の活動にて使用することになった。これまでは小学校は午後1時、2時には終了して、それ以降はクラブに開放され活動することができていた。クラブの多くは学校施設を活用していることが実情なので、活動場所の確保が困難になってきた。
- (2) 高齢化
高齢者対象のクラブである「老人ホーム訪問」で対応策が見えると思われる。
- (3) スポンサーの確保
競技スポーツにとって大きな課題となっている。お金の流れはどうしても人気のある種目に偏りがちになる。
- (4) クラブの融合
小規模クラブが存続するためにはクラブ同士での融合が必要になってくる。
- (5) 専任スタッフの確保
- (6) クラブの多様な対応の必要性
スポーツ施設以外での活動等にどう対応していくか、やりたくても施設がない場合、クラブはどう対応していくか等。
アイデアを出せば、他の施設活用の可能性もあるのではないかと考えている。

重要なのは、その場に応じた課題に対しての想像力やアイデアが必要であると考えます。何かをする時に、何かを待つのではなく、何が求められていて、何が利用できるのか、常に考えながら追求し作り出しに行く姿勢が求められるのではないかと考える。

【報告：愛川 政弘】

自治体のスポーツ振興

講師：ハンス・ペータ・バルター氏 (コルシェンブロイヒ市 スポーツ課長)

講師の経歴

- ・旧東ドイツのライプチヒ大学 (スポーツ科学) を卒業。
- ・1988年に西ドイツに渡り、現在はコルシェンブロイヒ市のスポーツ課長として勤務している。
- ・ボランティアでクラブの事務局業務や陸上競技のコーチをしている。(円盤投げの有資格者)

コルシェンブロイヒ市のスポーツ状況

- ・スポーツ環境
 - 人口33,000人の内、50才以上が13,000人 (約40%) で15才までが5,500人
 - 基礎学校：6校
 - 中等・高等教育の学校：3校
 - スポーツクラブ：38クラブ (内、32クラブが市スポーツ連盟に登録)
 - クラブ会員：11,200人
- ・スポーツ施設
 - 体育館：15カ所 (1カ所のみクラブ所有)
 - コート3面とれる：2カ所
 - コート2面とれる：3カ所
 - コート1面とれる：10カ所
 - 屋外グラウンド：11カ所 (全て市所有)
 - その他：63カ所 (全てクラブ所有)
 - テニスコート：31カ所
 - ケーゲル場：4カ所
 - 馬術場：10カ所
 - 射撃場：18カ所



講師：ハンス・ペーターバルター氏

行政サービス

- ・市のスポーツ予算：4万ユーロ。但し補助を受けるには、以下の条件が必要である。
 - ①活動内容は非営利である
 - ②事務局が市内にある
 - ③クラブ名に市の名前が入っている
 - ④州、郡、市のスポーツ連盟に登録している
 - ⑤会費を徴収している
 市とクラブとの信頼関係のもとに補助を行っている。
- ・クラブの青少年活動：2万ユーロを補助している。
- ・その他の補助
 - スポーツクラブとしては、無料で市の施設を利用できる。(但し、水、電気等の費用は市で33%を負担している。施設使用時は、クラブが時間あたり1ユーロを支払う)
 - 指導者やコーチの育成費用に対しては、市が全額負担する。
 - クラブがライセンス登録をする場合、一つの



講義風景

ライセンスあたり最大150ユーロを市が負担する。

ドイツの全国大会に出場する場合、経費（宿泊費、交通費等）の75%を市が負担する。

テニスコートや射撃場の改修費の25%は、市が負担する。

毎年、スポーツに貢献した方にメダルを授与し、その他最優秀選手やチームを表彰する。（一流選手のサイン会あり）

スポーツ課の主な事業

- ・小学生を対象にした水泳教室の開催
- ・全学年対象の陸上競技大会
- ・市のケーゲル、サッカー等のスポーツ大会
- ・市民ランニング大会（10km）：20～30カ国、約3,500名参加

【報告：茂呂田 光男】

スポーツクラブの健康志向コース

—健康志向のプログラム・コース提供について—

講師：アクセル・ベッカー氏（ライン・ノイス郡スポーツ相談課）

現代における『健康』の意味

社会の発展とともにドイツでも少子高齢化が進み、そして個人主義が進んできている。その中で健康について考えてみると、20歳半ばまでは何も考えることはないが、40、50、60歳になると深く考え出す。このような傾向はここ10年で現れ、以前は「健康か?」「病気か?」と軽く考え、年齢とともに病気になっても仕方がないと当然のように思っていた。ところが近年ではそのような状態が受け入れられないようになってきている。また、喫煙・飲酒・ストレス・憂うつ感・社会関係など生活の上でさまざまな健康へのリスクがあり、これらを改善するには「栄養と運動」を有効に取り込む必要がある。健康維持にはスポーツを行う。ただ、スポーツを行うことだけでは健康にはなれない。スポーツに必要な栄養を取ることも必要である。そして今、『健康を維持するために、自らが何をするか』という考え方が大切になってきている。

スポーツと健康の関連性

健康について考える時にスポーツだけを考えればいいかと言うとそうではない。スポーツは万能薬ではなく、健康の保持増進のための一つのツールに過ぎない。健康は日常生活の本質的な要素であり生活目標になるだけのものではない。

では、スポーツは健康のどの側面に対して貢献できるか?

1. 身体の機能性
 2. 日常的な身体能力
 3. 個人的な生活形成
- 以上の3点である。

クラブが健康志向のスポーツコースを提供する場合に重要な目標は



講師：アクセル・ベッカー氏

1. 身体的な健康資源の強化（体力）
2. 心理社会的な健康資源の強化
3. リスク要因の削減
4. 身体的苦痛及び不調の克服
5. スポーツ活動習慣の構築
6. 運動状況の改善

以上の6つであり、スポーツに関連することとしては身体的な強化でしかなく、それ以外はスポーツ以外のことである。クラブとして健康志向を考える場合、体力の向上だけでなく多角的な視点から考えることが重要である。

スポーツと健康コース

では、多角的に考えてみると実際には幼稚園、学校の教育、育成コース、企業、養護施設、病院など様々な環境における健康促進的コースのプログラムと各方面の専門的知識を持った人材が必要である。それは指導者、専門コーチであり、スポーツプログラマーであり、一種のプロフェッショナルな集団が要求されるようである。

いつでも、どこでもその機会を与えることができるか、セッティングは、タイミングは?

従来通りのプログラムを提供するのではなく、ライフスタイルに応じた世代コースのプログラムを提供することである。ドイツにおけるターゲットグループの配分として子ども、青少年対象は12%、成人は79%、高齢者は9%であるが、少子高齢化問題も抱えている中、1つは、子どもの健康問題では目標値の設定として生活態度の変更、健康資源の強化促進。また、成人の心臓循環器疾病者へのリハビリ、社会的ストレスなどの克服、そして、高齢者の健康促進である。リハビリテーションの目標設定としては、身体的障害による影響の補償。身体的、精神的負荷に対する耐用性の強化。自分で生活の責任を持つ。自己観察と身体知覚の勧め、健康に向けた生活態度の変更、質の向上である。ここにスポーツクラブの期待があるようだ。

スポーツクラブの基本条件

クラブ運営を支えてくれている様々なパートナーがスポーツクラブに対して抱えている期待として、下記のことが挙げられる。

1. サービス及び活発な行動の提供
2. 質の高いコース
3. 信頼性
4. 優れた組織性
5. 健康領域での要求全体に対する行き届いた配慮

これら運動に関する提供ができる団体の中でスポーツクラブはもっとも認められた他をリードす

る団体である。このポジションを維持していくためには、さらなる改善と発展の努力を続けていくことが必要である。

また、健康志向コースがクラブにもたらすチャンスとして、

1. 会員の維持
2. 新しいターゲットグループの獲得
3. 地域力としてのイメージアップとアピール
4. 他の関連団体との連携協力
5. 財政手段の獲得
6. 将来の計画と保証 などが挙げられる。

健康志向コースの提供等、健康関連分野での計画に必要なものは、人材、場所、用具の確保。組織と管理。マーケティングと広報などが挙げられる。クラブは必要なものに対してクラブマネージャーを中心に確実に獲得していく必要がある。ドイツでは健康へのキャンペーンとしてクラブ連盟等が組織的、共同で行い、健康志向のスポーツコースを知らせること、また自分の健康意識を高める活動を行っている。

1. 健康は重要性をます社会的要因である。
2. 健康志向コースは人々の健康維持をサポートする。
3. コースのプランニング、組織、実施には体系的で品質を重視した取り組みが必要である。

以上、健康志向コースを取り組むことはスポーツクラブの将来のカギを握るものである。

【報告：前田 晃】

スポーツクラブと 小学校の連携

講師：ギーゼラ・フーク女史（ライン・ノイス郡学校スポーツ委員会事務局長）

私の名前は、ギーゼラ・フークと申します。私の担当は、競技スポーツと学校スポーツです。私は、3人の子どもを持つ母親です。その内、一人の娘はレスリング選手です。競技スポーツと学校との関連もお話したいと思います。私自身は、仕事と併せて水泳のコーチとしても働いています。



講師：ギーゼラ・フーク氏

1. ドイツの学校システム

ドイツの教育問題は、連邦で責任を持って行うもので、全国的に統一されたシステムはなく州ごとに行う。教育の組織構造は、州の教育庁、学校監督庁、市町村の学校課、校長・教頭の学校経営陣、教師とトップダウン方式に決定が下されている。現在のドイツのシステムは過渡期である。以前のトップダウンから学校は自分達でマネジメントする方向になっている。その為、大きくいろいろな問題が出てくる。上からの指令に対して衝突が起こっている。この起点になったのが、ピサ調査（学力検査）の結果である。ドイツの子ども達の成績があまり良くなかった事を受けて、学校首脳陣のマネジメント力が必要になっている。

学校形式は、3歳から6歳が幼稚園、6歳から9歳が基礎学校の初等教育、9歳からはそれぞれの進路に応じて、中等教育、高等教育へと進んでいく。

基礎学校は8時から13時の授業形態であったが、3年前から全日制が導入され17時頃まで学校で授業を受けることになった。全日制を導入するまでは、午後はクラブが子ども達の世話をして学校と役割分担が出来ていた。しかし、75%の学校が全日制を取り入れているので、学校とクラブがどのように協力して行けば良いか大きな問題になっている。

2. 学校とクラブの連携による 利益と動機

全日制になり、午後の時間のプログラムは学校が決めることが出来る。スポーツだけでなく音楽などいろいろな機関や団体と協力をして子どもの世話をしている。また、学校にとっては特色を出すことが出来、子どもや親にとっては参加したい種目やプログラムを指導してもらえ学校も選択することが出来る。

学校とスポーツクラブが連携すると、次の様な利益が生まれる。

- (1)学校の体育とクラブのスポーツ活動には、運動能力を十分に発揮させることができるようにする大きな社会的責任がある。
 - ・・・子どもに運動をする場を提供して運動能力を発揮させることは、学校にとってもクラブにとっても共通の考えであり目的である。
- (2)学校は授業を越えた多様なスポーツ活動を通して、教育が担うべき課題を実現し、教育のプロファイルをより魅力的なものにすることができ

る。

・・・学校には、体育教師がいないところもあるので、クラブと連携をとることによってプロフェッショナルな指導を受けることができる。学校のカラーを出すこともできる。

(3)スポーツクラブは、子ども達の要求に応じて多様なスポーツの機会を提供することで、社会政策的な義務を引き受けることになる。

・・・体育の時間はあったが、専門の教師がいなかったため、他の教科の教師が授業を行っていた。学校と連携することにより、クラブにとって社会的に子どもの発達に協力できる。たとえば、クラブの指導者が学校に派遣されれば、子どもの体力測定をしてどのような運動をしたら良いか、アドバイスや指導が出来る。

(4)子ども達は、日常生活の中で失われた運動や社会的な活動を埋め合わせる必要がある。

・・・どのクラブ、どの団体と連携するかは、学校が決めることができる。学校のカラーとして、子ども達にどのようなものを習得して欲しいかを学校経営陣が決定する。

(5)学校とスポーツクラブが協力することで、子ども達に多様な運動や遊び、スポーツの機会を提供することができる。

・・・クラブは子どもの体力低下を回復させるプログラムを提供することができる。これまで学校が出来なかったことを、クラブが補ってくれる。

(6)運動と遊び、スポーツ活動は、子ども達の健康について明瞭な意識を持った生活スタイルを築き、しっかりとした人格形成をしてもらうために、大きな貢献をする。

(7)学校とクラブが協力すれば、学校の授業を越えてさらにクラブにおいてもスポーツを楽しむことができ、クラブとの長期的な結びつきが強くなる。

・・・この活動を通してクラブと子どもが関係

を持つことによって、クラブへの加入のきっかけとなる。

(8)学校とクラブが行動を共にすることで、それぞれが持っている資源が一緒になり、提供できるスポーツのパレットが一段と大きくなる。

クラブでの活動は、学校が終わってからの限られた時間であったが、日中も学校施設を使って子ども達を指導することが出来る。

以上のことから、スポーツクラブが学校と連携をしていくことは、利益をもたらすこととなる。

Q1. ドイツの学校の費用はだれが負担するのか。また、午後の活動の費用についてもだれが負担するのか。

A. 基礎学校については、授業料は無料である。州、町からの支援を受けて教師の雇用に係る費用などに使われる。学校はかなりの財源を持っている。

午後の食事代は親が負担する。スポーツや音楽活動の指導者の報酬は、州、町、親が分担して負担する。指導者を派遣するクラブや団体に支払をし、直接指導者には支払いはされない。

Q2. 日本の子ども達を取り巻くスポーツ環境は、学校やクラブ・競技団体が、指導している子どもを抱え込んでしまう傾向がある。ドイツでは、スポーツの機会を広げるという視点の生涯スポーツと競技選手を育てる為にサポートする視点の競技スポーツを、学校とクラブがどのような関係を持って取り組んでいるのか。先生の子どもの場合はどうだったのか。

A. 全日制になる前は、親やクラブが子どもの才能を見出し、親がその才能を伸ばすことができるクラブを選択し、クラブが育てていく。当時は、学校の終わった時間にクラブへ行っていたので、学校との連携はなかった。

3年前からの全日制の導入により事情が変わった。子どもの才能を学校側が見出したと

すると、学校のカラーとして子どもの才能を伸ばす為にサポートする。学校だけではできないので、クラブとの連携を積極的に行うようになった。

ドイツの競技スポーツのトレーニング拠点は、基本的にはクラブである。たまたま学校で優秀な選手が出る場合があるが、これはクラブ関係者が携わっているからである。

Q3. スポーツユースと学校の関わりはどうなっているか。

A. 全日制導入前は、学校とは全く関係を持っていなかった。全日制になりクラブと学校が関係を持ち始めたため、今は影響がないが10年後くらいには出てくるのではないかと。

【報告：金山 恵美子】

クラブマネジメント

—現在の傾向・成長—
—クラブの現場実務—

講師：ゲスタ・ミュラー氏（ノイス市スポーツ連盟事務局長）

経歴

- ・自身も競技スポーツとしてフェンシングに取り組んでいた。
- ・2003年から現在のノイス市スポーツ連盟で勤務している。

スポーツシステム

ドイツのスポーツ連盟は、自主・独立運動を基礎として誕生したといわれている。ドイツのスポーツ組織は、各種の責任が分担され構成されている。組織的なスポーツ活動は、基本的に非政府組織が責任をもって組織化し運営している。連邦レベルのスポーツ組織としてドイツオリンピックスポーツ連盟や各種スポーツ統括団体がある。この連邦レベルのスポーツ統括団体は、それぞれ連邦単位のスポーツセンターを持っており、ドイツオリンピックスポーツ連盟から給与を受けた連邦コーチによる指導体制を整えている。次に州レベルでは州スポーツ連合やスポーツ統括団体があり、さらに市、町、村の連盟がある。そして地域レベルには各種のスポーツクラブがある。ライン・ノイス郡は、120のスポーツクラブで33,000名の会員を抱えており、通常は専任の事務局長はいないが規模が最大なので専任としてゲスタ氏が働いている。

地域のスポーツクラブは、運動推進の土台となっており、その活動は社会・保健政策、教育政策などの有効な支援機能を担うなど、多くの役割・機能を果たしている。

スポーツ連盟の仕事

郡・市町村当局に対してクラブの利益を代表する所である。クラブマネージャー及びコース指導者



講師：ゲスタ・ミュラー氏

の養成及び研修の為のコースを実施する。市町村レベルにおけるスポーツ振興としては、地域住民に対するスポーツ・レクリエーションサービスの提供、スポーツクラブが有益になることの支援、クラブ会員以外の相談窓口、広報活動や団体とのパイプづくりなどの事業に力を注いでいる。

活動例

1. 体力テスト（跳ぶ、走る、泳ぐ）を実施して証明書を発行する。年に2回
2. スポーツの啓発をするイベントの開催
3. スポーツ競技大会の開催
4. ナイトイベント（クラブに所属していない子ども・青少年対象）の開催
5. 世界（アメリカ、クロアチア、フランス、ロシア、トルコ）5つの都市とパートナーとしてスポーツを通した子どもたちの交流プログラムを行っている。

課題

小学校では、全日制が3年前から起こってきた。クラブにとっては新たな対応を迫られる動きと

なっている。これまでのスポーツ・運動については、下校後、専門の指導者を有する地域スポーツクラブで行われてきたが、学校の枠の中で、子どもたちの指導が行われているということで、会員数に与える影響などクラブにとって新しい対応を迫られている。また、高齢者にスポーツ・運動の機会を提供し仲間づくりをしていくコースを強化していくことが課題となっている。

対策

対策としては、1つ目にクラブからの指導者派遣を行い競技力がある子ども達は、地域スポーツクラブで活動し、運動能力が劣る子については個人に合ったプログラムを提供している。

また、2つ目に競技力向上を目的として競技大会を開催している。3つ目に学校へスポーツクラブの売り込みを行っている。

【報告：城野 和則】

学校とスポーツクラブについて

— 将来の挑戦 —

— ドルマーゲンにおける学校と競技スポーツの連携システム —

講師：ハンス・ペータ・ケーニッヒ氏 (TSVバイヤードルマーゲン)

スポーツと学校をクラブとしてどのように係わっていくか、特に競技スポーツ分野の学校との連携をどのようにするかがケーニッヒ氏の担当である。



講師：ハンス・ペータ・ケーニッヒ氏

ドルマーゲン市の基本データ

人口 約63,000人

デュッセルドルフとケルンの大都市の中間に存在する。

ドルマーゲンの学校について

基礎学校	13校
基幹学校	1校
実科学校	2校
ギムナジウム	3校
特殊学校	1校
統合学校	1校
職業学校	1校

TSVの活動について

バイヤー社のサポートを受けて競技スポーツの強化拠点になっている。



TSVバイヤードルマーゲン事務所

1. スポーツ種目、年齢層を越え、全体的にサービスしている。
2. 競技スポーツとして、フェンシング、陸上、水泳、ハンドボールは州の拠点となっている。
3. 周辺の学校と連携して生徒を預かりながら、能力のある後継者を探す。地域のヒーローモデルとしてトップアスリートを育てる。
4. 子どもの会員が減り、5,000名以上いた会員が現在は4,000名台に減った。しかし、周辺地域に専門にトレーニングできる場所がないため、競技スポーツの会員は増加している。

競技スポーツと教育の取り組み

- ・1987年 学校とクラブの関係 タレント能力の高い子どもを探し、能力を伸ばす。
- ・1997年 部分的寄宿舎制を始める。
- ・1999年 午後の時間を利用したクラブとした。
- ・2008年 全日制となった基礎学校と積極的に連携を始める。

学校との連携による競技スポーツの環境づくりについて

1. 若い年齢の子どもの発達を観察し、能力を伸ばしていく。
2. 州政府の支援を受けながら学校へ専任コーチが行き、課外活動に参加して指導をする。その中で能力ある子どもを探し、クラブへ来て専門トレーニングを加えて能力を伸ばしていく。
3. 学業とスポーツを両立させるためにクラブ内に部屋を設け、学校より教員に来て戴き、学業面のサポートを行う。
4. 部分的には寄宿舎を用意したり、学校へ行き、車で送迎したり、子どもに時間を無駄にせず、有効に活用できるようにする。
5. 学校を周り、子どもを集め、昼食を与え、教員に来てもらい、試験準備をする。

例としてカーダー（強化選手）取得者は週30時間特別なトレーニングを行う。

最近ではカーダーを持っていない子どもの親が希望し、その子どもたちの世話をするようになった。トレーニングは週に1日～4日、参加日数を選択でき、状況において寄宿舎を用意し、子ども達を成長させていく。

勉強しながらスポーツの能力を上げていく方法

- ・学校の5～9時間のうち、2時間をクラブのコーチが受け持つ。
- ・12才までの子どもは必要に応じたプログラム（体力をつける、運動能力を発達させるなど）を提供する。
- ・13歳以上の子どもはクラブへ来てもらって週2回の専門トレーニングをする。
- ・スポーツ学校にはスポーツクラスがあり、クラブとして関わりを持てるように学校へ行き、子どもたちの世話をしている。

ネットワークづくり

TSVを中心にいろいろな団体や企業と連携を

とりネットワークを作っていく必要がある。

例として、州、全国のスポーツ財団や専門の競技スポーツ団体からコーチの報酬や寄宿舎の費用などをお願いする。また、銀行や町より支援をお願いする。医学面で競技スポーツ専門のケルンスポーツ大学と連携をとる。今後は幼稚園へ行き、積極的に仕掛けていく必要がある。

クラブの成果

（世話をしていた時のメダリストの数で進学後に記録したものは含まれない）

- ・世界選手権
金メダル7個、銀メダル6個、銅メダル15個
- ・ヨーロッパ選手権
金メダル9個、銀メダル8個、銅メダル7個
- ・ドイツ大会
金メダル158個、銀メダル127個、銅メダル116個
- ・ドイツ記録保持者 2名

質疑応答

質疑 1

Q：スポーツ施設の所有とバイヤー社のサポートについて

A：スポーツクラブのものとなっている。なお、バイヤー社から運営の60%以上のサポートを受けているが、下がっている。

コーチの報酬を公的機関の支援を獲得していかないとならない。また、会費、参加費など経済行為を増やしていかなければならない。今回、陸上競技場を改修した費用の70%は州からの支援。



BAYER DORMAGENの看板

質疑 2

Q：バイヤー社からサポートを受けているがクラブとしてバイヤー社に対して還元していることは何ですか。

ハンス・ペータ・ケーニツヒ氏より

A：1. バイヤー社は化学工業で危険な要素を周辺の方々に与えていることもあり、その地域支援とし、信頼関係を築いている。
2. コマーシャル効果。選手が金メダルを獲得することで大きな意義がある。
3. スポンサーの看板、宣伝もクラブが代替える。

アクセル・ヴェルツ氏（TSVバイヤードルマーゲン）より

A：バイヤー社では従業員の身体、心理的負担が増えており、従業員の健康維持に対してクラブを利用している。



アクセル・ヴェルツ氏

従業員の健康状態を維持することは、損出を減らすことにつながり、会社の経営状態にもよい影響を及ぼす。

【報告：杉山 克秀】



Ⅱ クラブ視察

クラブ視察 ①

コンシエンブロイヒ シニア世代スポーツクラブ

—クラブ活動— —クラブプレゼンテーション—
—理事との懇親—

歓迎の挨拶

インベ・シュルツ理事長 (女性)

ようこそオールドジェネレーションクラブへいらっしゃいました。

日本の皆さんと交流出来ることを大変誇りに思っております。

日本では大きな震災があったにもかかわらず力強く生活していることに敬意を表します。

日本での震災の影響により、この地域で毎年行われる日本の文化と触れ合うヤーパンターク (日本の日) が5月から10月に変更になりました。

今回の震災に際し、コンシエンブロイヒ在住の日本人が被災地へ義援金を送りました。

視察後、日本でもシニアクラブを立ち上げてもらえるとうれしく思います。

理事の紹介

アバン理事 (男性)

・クラブ内部の調整業務を重点的に担当。

フーベル・トウ・トクロウトウ理事 (男性)

・クラブの財務と会員の管理を担当。

マリアンネ・バレンティン理事 (女性)

・会計収支管理を担当。

フランツ・フィルツ理事 (男性)

・ケーゲル (ドイツボーリング) の指導を担当。

*ケーゲルとは穴のない少し小さいボールを使用するのボーリングのようなスポーツ。

クラブの紹介

・当クラブは1978年にシニアスポーツを通じ健康に寄与することを目的に設立。

・スポーツや社交イベント、劇場でのお芝居やお



クラブ理事の方々

ペラ観賞、観光やレジャー旅行など様々なメニューを行っている。

- ・毎月1回、朝食の会 (食事と講義) を開催。尚、食事内容は月毎に変わる。
- ・会員の旅行として、1日 (日帰り) の小旅行、12日以上長期旅行もあり、主な場所は温泉地など。
- ・心臓系の弱い方のための健康スポーツとして、バレーボール・体操を週2回 (月・金) 行い医師が帯同しサポート。
- ・老人ホームに出向いての椅子体操・名前を呼び合いながらボールを投げあう運動。
- ・病院と連携し、リハビリを兼ねた温水プールを利用した水の中の体操。
- ・脳を鍛えるためのカード・トランプなどのゲーム。
- ・他の活動プログラムとして、チングゲン体操・水泳・ヨーガ・ハイキング・ノルデックウォーキング・ケーゲル・ダンス・気功・講習会などを行っている。



クラブハウス



ケーゲル場

質疑応答

Q：会員構成は？

A：現在826名の会員が参加している。（男女比率は男性が3分の1、女性が3分の2）
年齢構成は、54歳から92歳。

Q：医師はボランティアか？

A：医師は専門的な特別な資格なので有給。
名誉職は、ボランティアとして活動している。
指導者についての謝金・交通費の支払いは、
色々なケースがある。

Q：会員以外の参加はあるのか？

A：会員以外でも参加できるが会費は少し高い。

Q：会員の勧誘（高齢者）はどうしているのか？

A：町のお祭りに広告を作成し宣伝・口コミ・ホームページに写真で分かり易く掲載する。
新規会員の獲得（特に男性）はむずかしい。

Q：ネットワークの構築は？

A：会員を対象におでかけイベントとして、弁当

を持参してのハイキング（食事をしながら会話を楽しむ）。

医師の確保については、地域に問い合わせるが、特殊な資格なのでむずかしい。

ボランティアクラブとしての一番のモチベーションは仲間と一緒に楽しく活動ができること。

Q：シニアクラブを設立した理由は？

A：高齢者に元気になってもらいたいという願いから。

設立当初と現在の同年齢の方を比較して元気になっている。

Q：高齢者の交通手段は？

A：自転車や公共の交通機関（バス）などを利用。

視察終了後、近隣のスポーツセンターに移動しシニアクラブの皆さんと夕食をとりながらケーゲル（ドイツボーリング）を体験

【報告：下澤 弘嘉】

クラブ視察 ②

TUSグレーベンブロイヒ

ーサッカー部門訪問ー
ーユース育成コンセプトー

はじめにローター・ツィンマーマン会長より歓迎のあいさつがあった。

会長は選挙で選出され、自身は税理士を務めているとのこと。

続いて、サッカーユース担当のフリーデル・ゴイエンニッヒ氏からクラブの概要等について以下の説明があった。

概要

- ・典型的なドイツのアマチュアスポーツクラブで、サッカーを中心に、バドミントン、バレーボール、ハンドボール、ビリヤード等を行っている。
- ・また、コロナスポーツという心臓疾患を抱えた方への軽スポーツも行っている。
- ・今年で創立100周年の歴史を持ち、老若男女問わずスポーツ活動ができる場を提供することを目的に発足した。
- ・会員は1,800人を超え、内600人がサッカー部門
- ・施設はクラブハウス（クラブの所有）、スポーツ施設は市の所有だがクラブに使用の優先権があり、陸上スタジアム1面、サッカー練習場2面、



陸上トラック・サッカー場



ローター・ツィンマーマン氏（左から2番目）、フリーデル・ゴイエンニッヒ氏（右から2番目）

体育館等がある。

- ・専任スタッフは置かず、指導者もすべてボランティアである。

歴史

- 1911年 設立
- 1925年 サッカー場完成
- 1928年 アムステルダム五輪にクラブから選手を輩出



クラブ活動風景

2011年 100周年記念事業開催

ブンデスリーガ(国内トップリーグ)チームを招いて、U-11のサッカー大会開催など

サッカーユース年代育成

- ・サッカー部門の黄金期は1950～60年代でドイツリーグ4位の時代もあった。
現在は6部
- ・現在一般チームは6部で2位、女子チームは8部で1位の成績を取っている。
- ・ユース年代は14チームを35人のコーチが指導している。
- ・4歳からの年齢別に構成される7つのカテゴリーがあり、このすべてのカテゴリーをもつクラブは年々減少している。(学校の全日制移行により年少のカテゴリー維持が困難になってきている)
- ・子ども達の目標はクラブのトップチームでプレーすることである。
- ・ブンデスリーガ1部の1FCケルンやボルシアMGとユース年代のパートナーシップを結んでいる。

財政状況

- ・収入はユース会員会費、月6ユーロで約250人、他に企業からのスポンサー支援金、一般部門からの助成などがある。
- ・支出は指導者への謝礼やスポーツ用具、ユニフォーム等服飾代などであり、総額約8,500ユーロ。

【報告：村岡 明正】



トロフィーの数々

クラブ視察 ③

オルケン体操クラブ

—クラブ活動体験—

—理事との懇談—

1. オルケン体操クラブ

1896年に設立され、1961年には小体育館、1991年には大体育館が改築された。改築費用や、補修工事などの費用は、クラブ会費でまかなわれている。

設立当初は体操クラブとしての出発であったが、様々なスポーツ（体操、サッカー、バレーボール、柔道などの格闘技種目など）に取り組み生涯スポーツを楽しめるクラブとして活動している。クラブ会員数は約1,000名。



オルケン体操クラブ

2. クラブハウス施設について

クラブ施設は、スポーツ活動を行う場所でもあり、コミュニケーションの場、活動後の憩いの場、ミーティングや指導員などの会議の場としても使用されている。

①体操場

・体操に取り組む選手たちは、この地域(グレーベンプロイヒ)では非常にレベルが高く、優勝する選手も体操場でトレーニングに励んで



体操場

いる。

また、オルケン体操クラブ出身のコーチが指導を行っている。

②サッカーグラウンド (人工芝)

・サッカーコートは、市所有のものであり、オルケン体操クラブとは別クラブが管理を行っている。この地域では新しい人工芝のグラウンドであり、1年に1度人工芝内のゴムチップを入れ替えている。(人工芝は天然芝と比べ維持費が安く、アマチュアのクラブでは欲



人工芝サッカーグラウンド



トレーニングルーム

しがるクラブがある。)

- ・プロチームで人工芝グラウンドを持っていないクラブは、冬になると使用しにくる。
- ・この人工芝サッカーグラウンドは、16チームが使用していて週末には試合を行っている。

③トレーニングルーム

- ・クラブ会員は、フィットネススタジオなどに通わなくても、ここで自由にトレーニングすることができる。(この施設は、閉鎖されたフィットネススタジオを会費で買い取り、補修すべき箇所を直して使用している。)
- ・基本的には、愛好者からアスリートまで幅広く使用している。
- ・自転車トレーニングもでき、教室化していて一般の参加者も受け入れている。



柔道場

④体育館

体育館の床は上下に可動させることができ、舞台ができるようになっている。

体育館内には柔道ができる施設もある。成人男性が柔道のトレーニングに励んでいた。

⑤その他

クラブハウス敷地内にバーベキューができる場所があり、夏にはクラブでバーベキューパーティーなどを行っている。

クラブ視察の後には、理事との夕食懇談会が行われ、そこでは派遣団員とオルケン体操クラブ理事の皆様と、「よさこい」、「さくらビクス（金山団員が所属するクラブのオリジナルソング）」を楽しんだ。

【報告：一ノ瀬 正範】



よさこい



懇談会

クラブ視察 4

TSVバイヤードルマーゲン

—クラブと施設について—
—仕事への適正—

ホテルにバスが予定時間より早く到着したので、現地にも約束時間より10分少し早く到着しました。団員が持参したフリスビーや、記念に頂いたサッカーボールで時間を過ごしていたら、今回施設の説明をしてもらえるクラブマネージャーのアクセル・ヴェルツ氏が到着しました。

TSVバイヤー：Bayerとは会社の名前である。日本ではバイエル社と呼ばれている。

ドルマーゲン：Dormagenとは市の名前で、ケルンとデュセルドルフの間にあり、人口63,000人の町です。

アクセル・ヴェルツ氏の説明

アクセル・ヴェルツ (Mr. Axel Wertz)：元走り幅跳びの選手であり、体育大学を卒業している。有給でクラブのマネージャーをしている。

本クラブは、1920年にでき、5年前に屋外プールをBayer社から譲り受けた。全ての設備は揃っているので、選手（オリンピックの強化選手など）にとって便利なクラブである。



アクセル・ヴェルツ氏 (左)



クラブ事務所

1. 温水プール

正面玄関に、現在の気温と水温がデジタル表示されていた。(気温4℃、水温29℃) また、プールに利用時間や会費(料金)の掲示もある。

以前は、Bayer社のエネルギーを使えたが、最近ではエネルギーを購入しており、クラブ負担となっている。ドイツのプールの運営は例外なく赤字であり、自治体がいくらか負担している。しかし、Dormagen市では市財政が厳しく負担をしてくれないため、Bayer社と会員から市に働き掛けをしている。プールは毎日300人程度が利用している。周辺には50mプールはないため、運営できなくなると州の人にも影響が出てしまい、2012年



クラブ内のレストラン



陸上トラック・サッカー場



ビーチバレーコート



室内陸上トラック



室内トレーニング場

のロンドンオリンピックにも影響が出る。子どもの水泳教室も開催している。

2. 事務所

会員の入会手続き等を行っている。事務所内にはフェンシングのポスターが多く、クラブが重点的に取り組んでいる種目の一つである。このクラブは、ドイツの男女フェンシングの強化拠点となっているため、今活躍している選手は5～6才からクラブで練習をしてきており、ヨーロッパ選手権等で活躍している。ポスターはモスクワオリンピック当時のものから掲示されている。

3. 体育館（バスケットやエアロビクス）

クラブの施設の中で最も古い。ここの特徴は、子どもが遊ぶことができる施設（ブランコ、砂場）や託児所が整っていることである。

300㎡の大きさの中25人程度の女性がエアロビをしていた。

4. グラウンド

25年使っていたが、2011年に40万€のお金を掛けて改修をした。

5. 室内トレーニング場

フェンシング以外でも、水泳、ハンドボール、陸上の強化拠点になっている。

室内であるため、天候に影響されことなく常に練習ができすばらしいコーチの元でトレーニングができています。

他に、4コースある直線60mトラック、走り幅跳び、走り高跳びの練習が出来る施設。昼の部屋では柔道も可能である。

6. ハンドボール場

ハンドボール場建築のコンセプトは、

- (1)クラブが抱えているハンドボールのプロチームが理想的な環境でトレーニングが出来る。
- (2)小さなグループでトレーニングが出来、託児所も持つ。
- (3)様々な催しを開催して、経済的な利益を考える。

【報告：矢澤 敏臣】

クラブ視察 ⑤

BVヴェックホーフエン

最初にこの夏、日本の福島からの子ども達を招き受け入れた写真を見せてもらい、子ども達の交流の様子やスポーツ体力テストによる賞状とメダルの授与などの説明を受ける。残念ながらクラブ理事長のラング氏の奥様の手作りケーキではなかったが、ドイツの美味しいケーキとお茶をいただきながら、説明を聴講する。

スポーツ連盟とクラブの概要

この地域のスポーツは、郡のスポーツ連盟によって組織。

クラブはスポーツ連盟のパートナー。

ライン・ノイス郡は、人口45万人、内スポーツ連盟加入会員は、12万5千人

約370のクラブ（構成人数30名のクラブから6,000名のクラブまで）

郡の中で「最初のクラブ指導者の育成」を始める。

その為、他の郡からの質問も多い。

いろいろなクラブと協力、提携して個々のニーズにあわせたスポーツが提供できるように郡のスポーツ連盟が間に入りサポートしている。



クラブハウス内の風景



掲示されていた写真の数々

- BVヴェックホーフエンは、
役員はすべてボランティア
専任の職員5名のうち、4名が終日勤務、1名が半日勤務。

運営費の60%は、会費、参加費

40%は、助成金、地域企業からの寄付
(企業戦略として意味を持つため)

地域活動するクラブ

例えば、ノルトライン・ヴェストファーレン州で「子どもに運動をさせる」キャンペーン。クラブでは、幼稚園を訪問して、幼稚園児にスポーツ運動を提供。

現在、小学校の全日制への移行に対して、いろいろな問題が生じているが、各クラブが積極的に小学校への働きかけをしているところである。

青少年問題とクラブの概要

ライン・ノイス郡のスポーツユースにおいて対象人数（13歳～27歳）は、5万人。

青少年問題を考える上で、スポーツクラブとの連携は欠かせない。

今、この世代にボランティアに参加させる動機づけを模索。イベントを通しての動機づけ。

福島より子ども達が参加した際、ドイツの子ども達も参加。ボランティアの動機づけを行った。

ロンドンオリンピックを観戦させるために子どもたちをこのクラブから50人～60人連れていく予定。

ドイツには、体力テストがあり、この地域では、3,000人の合格者を出している。

質問 子どもをオリンピックに連れていく目的は？

A. 宣伝効果もあるが、日頃からクラブにおいてサポート（指導）する15歳～17歳の子ども達に日頃の活動に対しての褒美として連れていき、オリンピックを生で観戦させることでポテンシャルをあげる。

質問 オリンピックを観戦した子どものうち、何人ぐらいが、クラブのスタッフとして残るのか？

A. 今回、初めての試み。このことは動機づけであり、この中から何人が指導者として残るのかは、まだ不明。ボランティアの協力がなければ、スポーツクラブは経営できない。当然、他の方面からの経済的援助も必要だと思う。今、ボランティアに支えられているスポーツクラブの未来に対して対策を練っている。

今後クラブは、合併・提携が増えることが考えられる。会員が300名～400名のクラブは、経営的にも苦しくなると思われる。

地域住民にとっていつもまわりにクラブがあるので、自分の村のクラブが無くなるという危機感が全くない。将来は、クラブを運営できる専任の人材が必要。3～4つのクラブの経営は一つに統括しても、個々のクラブは、独立したまま活動するというような方法を取りながらマンパワーを補っていくことも考えられる。100年以上の歴史を持つクラブが多く、伝統の中で学ぶ事がたくさんある半面、伝統を重んじてしまい、近代化の波に対応できないクラブも多い。

●BVヴェックホーフエンは、ノイス市の運動場と建物を借用。

ノイス市は、人口15万人。（ライン・ノイス郡の中で一番大きい）

16のスポーツ施設運動場の中で一番大きく、3つの芝生グラウンド、1つの土グラウンド、3つの多目的体育館、クラブハウスを借用。

使用料は、無料（他の町では、使用料がかかる）管理人はノイス市より賃金をもらい在住。（他の町より羨望）

しかし、勤務時間の関係で、17時以降や週末の使用は、クラブが管理。このルールは、新しく、ノイス市のクラブはすべて責任をもって行っており、どのクラブも満足している。ノイス市は、スポーツに対しての理解がある。

●BVヴェックホーフエンは、1927年設立。

1955年まで、サッカーのクラブとして活動。

そのため、BVヴェックホーフエンと言えば、サッカー関係と思われがちであるが、サッカーの会員数は減少している。特にユース部門は、深刻。ノイス市には、17のサッカークラブがあるが、年齢別で構成されるカテゴリーを全て持つのは、6クラブのみ。

ユースのカテゴリーがつかれない原因は、両親の協力(世話)が得られないことがあげられる。

●BVヴェックホーフエンは、人口約1万人で、多くの国から人が集まり会員として加入している。その数は約17カ国である。



芝生のグラウンド

この地域には国籍を越えてスポーツをする目標がある。以前ギリシャ人だけのチームがあったが、解散した。国籍を越えて誰でも参加できるチームが大切だと考えたから。

- BVヴェックホーフェンで、今1番強いチームは、アメリカンフットボール。トレンドで、青少年から人気。800人の会員のうち180人がアメフトに所属。5年前に出来、ユースチームが1つ、大人チームが1つ、女性チームが1つ（去年2部でプレー）ある。

芝生グラウンドではサッカー、アメフトを、体育館ではバドミントン、空手、自転車、卓球を、毎週水曜日に自転車ツアー、さらには腰痛予防体操・子ども向け体操・女性向け体操などのコースを行っている。

青少年問題への対応として、夜間に青少年・路上にいた子ども達（14歳～18歳）を招き、2人のトレーナーをつけ、教室を開催している。（会費は社会保障費として市が負担）

基礎学校と提携して、放課後の課外活動において6～10歳を対象に卓球とサッカーを提供。

このクラブの年会費は大人72ユーロ（内8ユーロは環境整備代）、子ども48ユーロ（内6ユーロは環境整備代）。



視察風景

質問 女性のサッカーチームはあるか？

A. 80年代までは、女性のサッカーチームがあったが、今はない。12歳までは、男女共にプレーすることができる。

質問 ユースの子どもに技術面以外に気を使って指導するところは？

A. 技術面だけでなく、チームワークに気をつけている。勝ち負けだけではなく、協力して戦う事を注意して指導。規律も自然と学べるようにしている。

【報告：川崎 香織】



Ⅲ 団員レポート

団員：室矢 法文

NPO法人十勝サーカス
クラブマネジャー

はじめに

2007年、当時、自分が執筆した修士論文のテーマは「スポーツクラブによる地域コミュニティ形成の一考察」であった。以来、総合型地域スポーツクラブの創設に関わりながらも、その考察に基づく個別具体的な調査分析によるケーススタディへの欲求が常に頭の片隅にあった。そんな折、2012年度からさらに他の地域において、新たな総合型地域スポーツクラブの創設に関わることとなり、今回の研修に応募することが、何らかの形で自分に対する自らの行動の発奮材料になればと考え、幸運にも参加する機会を得ることとなった。

研修を終えた後の率直な感想として、今までに読んだドイツのスポーツクラブについての文献等は膨大であるが、実際に現地に赴き、五感で得た情報は、その蓄積された知識をおおいに活性化させるものであると確信している。

スポーツ社会学

大学院では公共政策を専攻し、そこから地域コミュニティを形成するためのひとつの方法論として、スポーツクラブの持つ可能性へと研究を進めてきた。そのため、今回の研修内容に予定されていたスポーツ社会学教授のフォルカー・リットナー氏の講義は、その中でも最も期待し、興味を抱いていたものであった。

残念ながら、講義自体は通訳を介さなければならぬため、時間的制約の中で質疑応答の少ないものとなってしまったが、最終日の答礼夕食会で偶然にも同じテーブルとなり、様々な意見交換をする機会を得られたことは、非常に意義深いものとなった。

意見交換した内容は、主に、ロバート・D・パツ



トナムが書いた「哲学する民主主義—伝統と改革の市民的構造」において、「欧州の病人」とまで言われたイタリアの地方制度改革が、「サッカークラブ」の有無によってどのような影響を受けたかという点について、それが他の国や地域でも該当するのか否かについてである。その意図は、リットナー氏の意見と、パトナムの意見は非常に近接している印象を受けたからであり、単刀直入にパトナムの主張に対しての意見を伺うことで、リットナー氏が持つ主張を類推しようとしたからであった。内容の詳細については、本旨ではないため省略するが、現在、リットナー氏は中国におけるスポーツクラブの創設にも携わっていると聞き、その年齢を感じさせないバイタリティに驚かされるとともに、理論と実践を兼ね備えた活動には、尊敬と同時に、羨ましい限りでもある。

競技スポーツ

今回の研修内容が示された段階において、前述のスポーツ社会学とは別に、もうひとつ非常に興味深い人物の講義が予定されていた。それは、ギーゼラ・フーク女史の講義である。

自分自身も、かつて選手として、現在は指導者

として、また自分と同様に競技スポーツに身を置いた娘を持つひとりの親として、同様の立場で研究を進めているギーゼラ・フーク女史が、どのような見解を持ち、どのようなジレンマを抱えているのか非常に興味があった。フーク女史が予定していた講義内容とは、若干外れるものの、フーク女史が持つ「競技スポーツと子ども」に対する見識については、「競技スポーツ」を核にもつスポーツクラブにとって、大変参考になるのではないだろうか。

残念ながら、フーク女史についてもリットナー氏と同様、講義中の質疑応答は時間的に難しく、短い時間ではあるが、答礼夕食会の席で意見交換をする機会を得ることができたものの、言葉の壁は予想以上に厚く、また専門的な部分になると踏み込んだ意見交換ができなかったことが残念でもある。ただ、その補足意見として、アクセル・ベッカー氏と直接会話し（英語）、ベッカー氏が捉えているフーク女史の考え方を確認できたことは幸いであった。いずれにしても、「競技スポーツ」、「英才教育」、「バーンアウト」等について、元トップアスリートでもあり、現指導者でもあり、なおかつトップアスリート選手の親でもあるフーク女史が、どのような考え方をもち、どのような指導をしているのか、日本の学校教育「体育」と比較し、大変興味深いものとなった。

日本におけるスポーツクラブ

スポーツに限らず、政治や法律、思想哲学等、様々な分野において、ドイツは世界の先進地であり、大部分をドイツの事例を参考に模倣してきていることは疑う余地がない。

そのため、総合型地域スポーツクラブを創設するにあたって、ドイツを参考にすることは有意義であろう。しかしながら、スポーツを行う動機の部分においては、日本特有とも考えられる要因があり、今回の研修講義でリットナー氏が提示したケルン市のスポーツクラブに関するデータにおいても、ドイツと日本の間における動機の差異が認められた。

これは、日本におけるスポーツを行う動機が、

「人との関わり」に対する回答が最多であるのに対し、欧米では「健康のため」が最多となっていることである。理由は種々考えられるが、ひとつのアプローチとして「クラブハウスの有無」を含めた相関を検証していけば、今後日本においてスポーツクラブを創設・運営していく上での有為な方向も見えてくるのではないだろうか。

これは、今回の研修において、日本のスポーツクラブと比較して最も差異を感じたものがクラブハウスであり、スポーツを行う場所であると同時に、スポーツを観たり、語ったり、そして、会員が飲んだり、食べたりする「居場所」があるということが、前述の地方制度改革やコミュニティ問題と合わせて、非常に大きな要因となっていると強く感じたからである。

また、各団体のクラブハウスに実際に赴き、その雰囲気や五感を体験したことは、自分にとって、次の考察への大きなインセンティブを与えてくれるものとなり、今後はぜひともクラブハウスを兼ね備えたクラブの運営について、様々な角度からアプローチしていきたいと思う。

最後に

20代の頃は積極的に海外研修に参加し、全国から集まった仲間達と毎晩飲み明かし、当時の仲間達とはいまだに交流も続いているが、今回、50歳間近の自分と、そして自分よりもさらに年上の方達、しかもドイツ語では日常会話もできない状態で講義を受ける中で、はたしてどのような研修が期待できるのか非常に不安であった。

結果は、毎晩飲み明かすところまではいかなかったが、クラブハウスにおけるドイツ会員のありのままの姿を引き出してくれたのは、人生経験豊富な年配の団員達であり、若い団員と年齢を超えて交流ができたのも彼らの陽気さあつての賜物である。

また、「ほぼ全てのドイツ国民が英語も話することができる」と聞いていたのは、研修に関わった人たちの中だけであつて、帰国前日の夜の街では、英語が通じない場面をたくさん経験させてもらい、ちょっとしたスリルも味わった。研修外で

の貴重な体験である。

非常に短い日数の研修であったが、ネットワークづくりという点においては今後に向けて大きく期待できる研修となり、非常に有意義なものとなった。

みなさん、大変お疲れさまでした。

Ⅲ

団員レポート

団員：村岡 明正

ニツ井きみまちスポーツクラブ
理事（アシスタントマネジャー）

研修参加の動機

小学生からスポーツを始めて40数年間スポーツ少年団や地域サッカー協会に関わってきた私にとって、ドイツはサッカーなどのスポーツにおける競技レベルの高さや、スポーツクラブ・スポーツ少年団のシステムなど、日本のモデルとなった国と感じてきた。

1995年に文部省（当時）が総合型地域スポーツクラブ育成モデル事業を開始する以前の1993年、Jリーグがスタートした年に、日本サッカー協会はJリーグ百年構想の中で、地域密着のスポーツクラブの重要性を打ち出し、スポーツ文化の確立を目指した。

そのモデルはやはりドイツである。

2008年から秋田県の人口1万人の小さなまちにスポーツクラブを創ることに関わり、ドイツのスポーツ環境を見て聞いて学ぶことは、スポーツクラブ運営において、また、秋田県能代市スポーツ振興課職員としての自治体のスポーツ振興においても、今後に必ず活かせると思ったことが一番の動機であった。

研修から感じたこと

1 ドイツも日本と同じ課題を抱えている

①財政問題

コルシェンブロイヒ市スポーツ振興課長バルター氏の講義から、ドイツの自治体も財政状況が厳しく、スポーツクラブへの助成もままならないが、何とかやりくりしていることなど日本と同様な課題を抱えていることは大きな驚きであった。

また、財政問題と関連して、市町村合併についても、ライン・ノイス郡スポーツ相談課アク



セル・ベッカー氏は、それぞれの地域への愛着と合併がもたらす財政のメリットのはざままで、揺れる心情を話してくださり、これもまた、実際に市町村合併を経験した私と同様な思いを感じた。

②学校教育とスポーツクラブの連携

近年、ドイツでは学校制度が半日制から全日制へ移行する中で、学校とスポーツクラブが連携して少子化などへの問題をクリアしようとしている。

日本でも、その連携は今後の進むべき方向として重要となると考えられるが、学校制度上困難な問題が多くあり、現在はごく一部のスポーツクラブが独自な方法で連携を行っているが、この問題は、ドイツ・日本ともに今後の大きな課題といえる。

2 ドイツと日本の違い

①歴史的背景による違い

ドイツでは1817年に最初のスポーツクラブが設立され、その歴史は200年にも及び、約90,000のクラブがあることは、もちろん大きな違いであることは間違いない。

今回訪問した、TUSグレーベンブロイヒに

においても、2011年は100周年となる歴史あるクラブであるが、ドイツでは特別な歴史を持ったクラブではないということである。

そして、このクラブにおいてもスタッフ全てがボランティアであり、そのボランティアの概念もまたドイツでは脈々と続いていると感じた。

また、ドイツでは人口の約30%の住民がスポーツクラブ会員であるということはまさに驚きであり、歴史的背景に基づくものであると感じた。

②スポーツ文化の確立

スポーツ文化とは何か？

日本のスポーツやスポーツプレイヤーが他の分野に比べて評価が低いとされるのはなぜか？

評価を上げるにはどうすればいいのか？

長年疑問に思っていたことの答えが、ドイツでの研修によって少しではあるが理解できた気がする。

それは、ドイツではスポーツ活動の土台であるスポーツクラブが、公共の福祉に貢献することが前提になっているということである。

スポーツクラブが地域コミュニティの場として、日本の自治会や町内会などのような住民にとって欠かせない役割を果たし、地域づくりに重要な組織だということである。

こういった社会的責務が100年～200年の間に積み重なったことが、スポーツが文化として、国に定着してきた理由なのではないだろうか。

3 日本のスポーツクラブに求められる役割

ドイツのクラブの例からも、ボランティアスタッフとしてクラブに係わり、子ども達も含めて地域住民とコミュニケーションを図り、地域づくりに寄与すること、いわゆる公共の福祉に役立つことが最も重要な役割である。

そのことが、地域とともに発展して行くスポーツクラブのあり方であり、現代の日本人が失いかけている心の豊かさや人との繋がり、子どもを愛する心を取り戻すことができる重要なファクターであることを強く感じる。

日本の中の小さなクラブであったとしても、全国の約3,000のクラブがこの意識を共有する

ことができれば、日本にスポーツが文化として根付くことができると思う。

夢はかなうと思う。

研修を終えて

今回このような貴重な研修の機会を与えてくださった、日本体育協会、また参加してみないかと声をかけていただいた秋田県体育協会の半田クラブ育成アドバイザー、ドイツで通訳していただいた多田さん、ものすごい人混みだった夜のデュッセルドルフを案内してくれた松尾さん、そして、日本体育協会の佐野さんをはじめ、伊端団長、同行した全国の皆さんに感謝いたします。

ありがとうございました。

最後に

私たちがドイツを訪れた2011年に女子ワールドカップサッカー、ドイツ大会において日本代表チームが見事初優勝を果たしました。

その大会の準々決勝は日本とドイツの戦いになりましたが、素晴らしい戦いの末、日本は前回優勝のドイツに勝ち、その後も勝ち進み、決勝ではフランクフルト上空で飛行機から目にしたフランクフルトスタジアムにおいて、アメリカを破り優勝することができました。

日本はその時、あの3.11東日本大震災の被害の直後にありました。

家族を失った私のサッカー仲間もおりました。

このようなときに、日本チームの「最後まであきらめない」その活躍は日本を元気づけるとてもインパクトのある出来事でした。

日本チームは試合ごとに「Thank You For Your Support」の横断幕を持って、世界やドイツの人たちに感謝の気持ちを表わし、観衆は温かくその気持ちを受け入れてくれました。

今回の研修でも、多くのドイツの人々の日本への温かい心に直接接することができました。

この年にドイツに行くことができたことはとても意義深いものでした。

ありがとう 「ドイツ」

団員：愛川 政弘

(財) 福島県体育協会 浜通り広域スポーツセンター
チーフマネジャー

はじめに

2011年3月11日の東日本大震災によって全てが変わってしまった福島県から、本研修に参加するに当たり、正直自分の担当する浜通りの被害状況を考えて初めは前向きになれない自分がいた。

ただ、これまでの福島県における広域スポーツセンターとドイツとの関わりの歴史、さらに今年度8月に福島県の中学生20名がドイツに招かれ、疲れ切った心と体を元気づけてくれた「うつくしまBande（絆）ドイツ派遣事業」に対する御礼の気持ち、そして今こそ歴史あるドイツのクラブから多くの危機を乗り越えた歴史を学ぶことで、力になれることを見つけられるのではないかという思いになり、出発前には前向きな気持ちで参加することができた。

震災後の福島県内の総合型クラブ関係者は、がれき撤去のボランティアとして真っ先に被災地に駆けつけたり、避難所での高齢者を元気づけたり、離ればなれになった会員等の再会の場となるようなイベントを開催したりする等、被災した自ら力を振り絞って地元の方々のコミュニティを復活させようと頑張っている。総合型クラブでなければ市区町村を救えなかっただろう感動の場面をいくつも目にしてきた。そんなクラブの底力を目の当たりにした自分にとって、ドイツの各地域に長年存在するクラブが果たしてきた役割は大いに興味のあることだった。

また、元々小学校の教員である自分にとっては、クラブと子ども達・学校との関わりはいったいどういう位置づけになっているのだろうか？という点も今回の研修で学びたいポイントだった。



ドイツのクラブに学ぶ

ドイツのクラブが地域のコミュニティ形成の場になっていることは長い歴史が物語っていた。日本と同様に、経営資源である人・物・金・情報という点で数々の課題を抱えていることも分かった。また、共通しているのは、その地域にあってよかった、欠かせない存在にクラブがなっていることも、関わっている方々の姿から伝わってきた。単にスポーツだけを行っているのではなく、地域の人々にとっての居場所であったり、楽しみ、生きがいになっていたりすることが高齢者の笑顔にも表れていたように思う。個人の生活に合わせて思い思いの活動を楽しむ環境が自然にあることよさを全身で感じ取ることができた。

確かに日本の総合型クラブにもドイツに劣らない、いやそれ以上の地域貢献をしている組織もある。日本の総合型クラブの将来像として、ドイツのクラブの自然体である姿を参考にしながら、今後伝統と誇りを積み上げていけるような関わりをしていきたいと思った。

福島県の総合型クラブは、一生に一度の大ピンチを凌ぎながら、地元の方々の心のよりどころとなるべく日々頑張っている。今後、広域スポーツ

センターとして関わっていく上で、クラブに関わってきた方々が、将来にわたって人々の救いになった存在として誇りに思えるよう、意気に感じながらこの危機を乗り越えられるよう、そして、心の底からの笑顔を取り戻せるよう力になっていきたいと思った。

ドイツのクラブと学校との関わり

ドイツでも学力向上、体力の向上等が学校の課題になっていることや、半日制から全日制への移行等、学校のシステムが変わったことでの会員減少等のクラブへの影響が日本と共通している課題であることが分かった。これまでのドイツのクラブというと、日本のような学校中心のスポーツシステムと違って、授業が終わったらスポーツ活動は地元のクラブでという印象があった。それがここに来て子ども達を取り巻く環境の変化、そして学校教育の変化に直面し問題になっていることが分かった。この点においては、日本の総合型クラブでは放課後の子どもの居場所としてプログラムを提供したり、部活動支援を行っていたりする等、

地域で学校を支援する取り組みをしている例もある。ドイツの先進事例を学びながらも、日本らしく、地域の伝統・文化として次代に引き継いでいく仕組みを作っていくことは、今後のドイツのクラブにも参考になっていくのではと感じた。

今後、ドイツとスポーツクラブを通じた交流が両国のスポーツ環境の整備、地域活性化の原動力となり、さらなる可能性を広げていく活動へと発展していくことを期待したい。

最後に

2011年クラブマネジメント指導者海外研修に参加し、全国から集まった熱い団員の皆さんと出会えたこと、そして、ドイツでの研修に関わっていただいた先生方や遠いヨーロッパから日本の事を心配し、応援してくれているすべての方々に感謝したい。

そして、今後本事業が益々充実した研修となり、日本の総合型クラブの発展につながるよう、全国の仲間と共に微力ながら力になっていきたいと思う。

団員：一ノ瀬 正範

ただみコミュニティークラブ
クラブマネジャー

はじめに

私が総合型地域スポーツクラブへ関わるようになったのは、今所属しているクラブの事務局長からお誘いいただいたことがきっかけであった。大学を卒業してすぐに、福島県と新潟県の県境となる只見町へ住み、現在設立4年目となるクラブ活動をしている。クラブへ関わった初年度には日本体育協会公認アシスタントマネジャーの資格を取得し、その他様々なセミナーなど参加させていただいたが、わからないことばかりで、クラブへ関わる地域の方々にお世話になりながら、何とかクラブ活動を運営しているところである。クラブの活動などで、それらに関わる皆さんと意見交換や情報交換をしながら、力を合わせてクラブ活動を進めていく中で、日を重ねるごとに総合型地域スポーツクラブへの魅力を感じている。そんな中で、平成23年度クラブマネジメント海外研修へ参加させていただけることとなった。

参加したきっかけ

平成23年度クラブマネジメント指導者海外研修に参加しようと考えたきっかけは、地域スポーツクラブの歴史が古く、最先端であると言われるドイツのクラブやスポーツを実際に目で見て、肌で感じたいという思いと、日本国内で総合型地域スポーツクラブへ携わる方々と色々な情報交換したいと考えたことからである。

ドイツに滞在して

実際、ドイツへ滞在して感じたことは、それぞれのスポーツクラブに関わる方々がクラブ活動や地域の活動に非常に熱意があり、それぞれに目的



ややりがいを持って活動していたことである。地域の学校、スポーツクラブ、スポーツユース（ドイツのスポーツクラブの会員のうち、27歳までの青少年を対象にした50年以上の歴史を持つ団体）、政治家など各々の立場の方々が地域ぐるみで活動に取り組んでいるという姿がとても印象的であり、クラブ活動へ多くの住民がボランティアで参加していることで成り立っているということに驚いた。

現地のクラブを訪問して

講義での研修、クラブ訪問での研修とたくさん学ぶ時間があった。サッカーをジュニアチームからトップチームまで育成、指導するクラブ（TUSグレーベンプロイヒ）や体操競技をジュニアから育成、指導しているクラブ（オルケン体操クラブ）を訪問し、芝生のサッカー場や体操場などがあり、専門指導者による指導が行われていて、スポーツをする環境が整っている現状を見ることができた。クラブをシニア世代が運営し、地域のシニア世代が活動できる場を創出しているクラブ（コルシェンプロイヒシニア世代スポーツクラブ）もあった。このコルシェンプロイヒシニア世代ス

ポーツクラブでは、地域の病院のドクターへ活動に参加していただくよう依頼し、協力関係を構築して健康の維持増進に取り組んでいた。

その他のスポーツクラブでは、クラブと企業が手を取り合って、スポーツ選手の育成や地域住民の健康、企業職員の健康維持、増進していくことを担っているクラブ（TSVバイヤードルマーゲン）もあり、夢のようなシステムを構築していた。また、スポーツクラブとは別に、スポーツユースでは、次世代のスタッフとなる人材を育成していこうと、スポーツクラブへスタッフとして関わったことのある高校生年代から成人の方々を抽選でプロスポーツ観戦に参加できる権利をプレゼントし、プロスポーツ選手やそれらに関わるスタッフを間近で見ることのできる機会を作ることにより、刺激を与え、見るスポーツ、支えるスポーツを創り出していくという動きもあり、スタッフの育成に悩む団体等では、実現可能であれば非常に魅力的なシステムではないかと感じた。

しかし、このようなドイツのスポーツ事情の中でも、日本と類似している部分があった。半日制だった学校教育制度が全日制へと改正となったことに伴い、改正前に比べてクラブが学校体育館を利用できる時間が短くなった。学校体育館を利用しているクラブが多いことから、クラブの多くは活動の幅が狭くなり、会員数の減少やどのようにしてスポーツ指導システムの維持を図るかといった課題を抱えている。学校とスポーツクラブの連携という日本の総合型地域スポーツクラブでも悩みとしているだろう課題がドイツでも課題となり、日々研究している現状が窺えた。

ドイツ研修を生かして

平成23年度クラブマネジメント海外研修へ参加して、以前から思っていた、もっと色々なスキルを学びたい、色々な人と関わるようになってみたい、という思いがより強くなった。

私は、20歳代や30歳代などのスポーツをやってきた多くの方々が地域の活動へあまり参加していない、できていないように感じている。それらの方々ももっと地域の活動へ参加できる機会や、地域に住む皆さんが魅力を感じて取り組める地域ならではのプログラムを提案でき、システムの構築ができるよう、ドイツ研修での経験を生かしたいと考えている。

ドイツのスポーツクラブを体感して

ドイツのスポーツクラブを視察し、クラブの実際の状況を肌で感じる事ができたことは非常に貴重な研修となった。地域のクラブ活動やスポーツに関わる方々の熱意や研究熱心な姿、地域やスポーツを発展させていこうとするシステムの構築、見るもの聞くもの全てが刺激的で研修の毎日が非常に楽しいものであった。また、研修と一緒に参加された日本各地のみなさんと様々な情報交換をさせていただけたことも、今後のクラブ活動の一端を担う者としてかけがえのない財産となった。この研修の貴重な経験を今後のクラブ活動や自身のスポーツ活動に生かせるように努力していきたい。

最後に、今回クラブマネジメント指導者海外研修に際しまして関係者の皆様に多大なるご協力をいただきましたことに心より感謝申し上げます。

団員：茂呂田 光男

スポーツクラブYOU GO！
クラブマネジャー

はじめに

総合型地域スポーツクラブの設立を準備していた平成17年に、県の担当者が紹介したビデオは私にとって今でも忘れられないものであった。その内容はヨーロッパ型のスポーツクラブを紹介するもので、これから立ち上げるスポーツクラブの理想的な理念や環境があり、将来ぜひ自分の目で一度は見たいと思っていた。今回、地域スポーツクラブの先進国であるドイツ研修への参加が決まり、長年の夢が現実のものとなった。

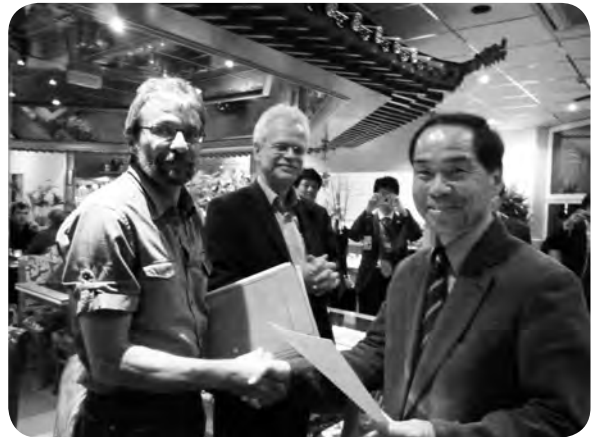
事前研修会の中で紹介されるドイツのスポーツクラブの内容に、“ワクワク”する状態であったが一つの気かりは、現地のいろいろな方とのコミュニケーションをどのように取っていけばよいかという点であった。講義や視察等においては、通訳の方がサポートしてくれるとのことなので安心であるが、個人的に聞きたい事や食事会の時には直接会話をする必要があったと感じていた。出発までにドイツ語を少しでも知ろうとテープを聞いたが混乱するばかりであった。最後はアメリカで暮らした時に覚えた“カタコト”英語にたよるしかないと思いつつの出発であった。

学び感じたこと

今回の海外研修で特に学びたかったことは、ドイツにおいてスポーツクラブが果たす社会的な役割について、実際にどのようなことが行われているかという点である。講義やクラブ視察の中でその内容を学ぶことができ、地域が抱える社会や生活の問題にスポーツクラブが真剣に取り組んでいることが解った。

1. 市民が抱える健康問題と対策

ドイツにおけるスポーツクラブ会員数は国民の



30%に達し（2006年時点）、その多くは「健康、体調管理、楽しみ」を目的に会員になっている。ライン・ノイス郡においても市民が抱えている健康問題は大きな課題であり、その中でも背骨や関節の痛みが他の疾患に比べ多い。この原因は、体を動かさない生活スタイルにより起きており、ここでのスポーツクラブが果たす役割は重要である。

クラブ視察では、心臓病の方のためのプログラムを行っているクラブがあり、医師のサポートを受けながらスポーツを楽しんでいる。

また、エッセン市における小学校新人生に関する調査では、運動能力の一つである調整力について調べた結果、地域により大きな差があり調整力に問題がある小学生の住む地域はスポーツが活発でない地域と重なっている。対策として、そのような地域のスポーツクラブ活動を盛んにすることにより、小学生の運動能力の向上を推進している。

2. 市民の社会参加

ドイツは市民活動として「スポーツ・運動」の占める割合が多く（40%：2004年時点）なっており、ボランティア活動としての「スポーツ・運動」の占める割合も他の活動より多い。このことから、スポーツクラブが地域社会からの要請に

重要な役割を果たしている。

また、市民が生活の中で幸福や生きがいを生み出すものとして、スポーツクラブが最も大きな成果を挙げている。

3. 町作りへの参加

ケルン市のスポーツ活動の活発度を見ると、明らかに地域によりスポーツ活動の状況に差がある。町作りをする上で運動が少ない地域に優先的にスポーツ施設を設置するための提案を行い、スポーツクラブを通して運動能力の地域差が少なくなるように努力をしている。

また、インターネットを活用して各地域の活動状況や固有のスポーツマップにより、地域の情報を発信して町作りに役立てている。

日本のクラブで活用できること

今回の海外研修を終え、スポーツクラブの社会的な役割について、実際に日本のクラブで活用できることを考えてみる。

1. 健康／ケガ予防への取組み

少子高齢化に伴い日本でも同じ健康問題を抱えており、厚生労働省の調査によれば65歳以上の男性の約11%、女性の約18%の人が関節痛を抱えている。また高齢者の骨折の主な原因は転倒によるもので、運動不足による体の運動・感覚の働きの衰えによるものと言われている。

スポーツクラブとしてできることは、単に楽しく運動するだけでなくケガの予防やケアに役立つプログラムを積極的に用意する必要がある。例えばクラブのスタッフの中にリハビリや整体の資格を持った人を配置して、傷害後のケアとして特別メニューを行う。その他栄養学のセミナーを開いて、食事とサプリメントの知識をクラブ会員の方に学んでもらうといったことも必要と思われる。

子どもの体力については近年低水準のままであり、今後スポーツクラブの果たす役割は非常に大きい。文部科学省が行った「総合型地域スポーツクラブに関する実態調査結果（平成22年度）」によると、特徴ある取組みとして「子育て支援」や「学校との連携」があり、更に推進していく必

要がある。

2. ボランティア活動

スポーツ文化の多様性に伴い、「する」スポーツ、「みる」スポーツに加え、スポーツを「ささえる」活動が新しくその意義や価値を認められるようになってきた。大きな活動としては、オリンピックでのサポートであるが、地域におけるスポーツ活動においては、スポーツクラブが果たすボランティア活動がますます重要になってくる。クラブ内における名誉職等のボランティア活動はもちろん、地域で行われるいろいろな活動に対しても、地域発展のためクラブ会員が楽しみを見つけて活動していく必要がある。

今後特に力を入れていく事業の一つとして、障害者に対するスポーツ推進のために、高度な知識と技術を持った指導者やスタッフを育てておくことが重要である。

3. 町作りへの参加

市の生涯スポーツの振興や発展に関して、市民レベル（スポーツクラブ）で調査・検討を行い、その具体的な結果を市に提言することは、効率的な施設整備やコース作りの参考になる。また、観光が盛んな地域においては、観光協会や旅館組合と協力して滞在型スポーツ観光を推進し、その拠点としてスポーツクラブが果たす役割を市民と一緒に考えることも可能である。更に市のスポーツ振興計画にも積極的に参画し、市民の豊かなスポーツライフ実現のための提案を行っていくことがスポーツクラブの役割ではないかと考える。

最後に

今回の海外研修のために出発前からいろいろと準備をされた事務局の方には、現地でもきめ細かく段取りして頂きありがとうございました。団長の行動力も素晴らしく団員間の親睦が図られ、楽しい仲間をたくさん作ることができました。現地の通訳の方も最後までお付き合いを頂き、初めてのドイツが安心して実りある研修とすることができました。関係された皆様に深く感謝します。

団員：矢澤 敏臣

昭島くじらスポーツクラブ
クラブマネジャー

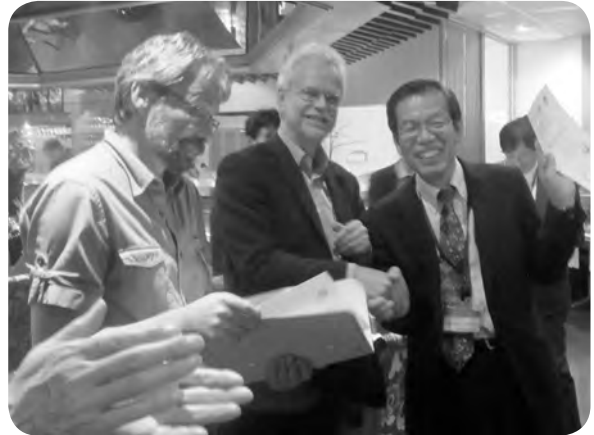
研修に参加しても良いのか？

ドイツのスポーツクラブを視察する研修事業があることは、数年前より知っていた。また総合型地域スポーツクラブの設立準備中に、日本体育協会や体育指導委員協議会が主催するセミナーの講師から「ドイツのスポーツクラブ」の話は2～3回程聞いていた。当時はドイツに興味はあったが、行きたいとは思っていなかった。しかし、今回の研修時には既に定年を迎え、スポーツクラブの運営に注力できるようになっていること、また1週間休むことが可能になったことで、実際にこの目で見てみたいと思うようになった。

しかし、我がクラブは2011年2月に設立総会を行ったばかりで、設立後数ヶ月しか経過していない。そして、クラブが開催している教室のうち、半分の教室は参加者が1桁であり「このクラブは本当に運営できるのか！」と先行きが見えない状況のクラブマネジャーが研修に参加しても良いものか？そして、東日本大震災が発生した影響で東京は計画停電をしている中、海外に行っても良いのだろうか？なんて迷いながら研修事業に申し込みをした。幸運にも参加できることになり、ドイツでの講義とクラブ視察を体験でき、更に日本各地でスポーツクラブを運営されている皆様から話を聞くことができたので、研修に参加したのは大正解であったと思っている。

事前研修会： 2011年9月2日・3日

事前研修会へ出席することがドイツ研修に参加するための一つの条件であった。事前研修会の2日前に定年を迎え「クラブを運営するが仕事」という生活に変わったため、問題なく事前研修に参



加できた。この時に初めて訪問する場所はケルン市であることを認識した。(帰宅後に調べたところ、ケルン市は15年前に仕事で訪れていた街であった。)

結団式：2011年10月17日

集合時間の15時より早く、集合場所の岸記念体育会館のあるJR原宿駅に到着したため、近くの明治神宮で時間調整をした。空は、まさしく秋晴れ！これからのドイツ研修が素晴らしいものになる予感。

結団式では、「ドイツに行って、ソーセージをつまみにビールを飲むぞ！」と宣言はしたが「何故、ドイツには多くのスポーツクラブがあるの？その答えを探しに行きます。」が本心（本当ですよ！）。

小学校（子ども）の環境

日本の小学校と比べて大きく違うところが2つあった。1つは、小学校に‘体育の授業’がない、又は‘体育の先生’がいない学校もあること。2つ目が、授業が午前中だけの半日であることです。

(但し、数年前から半日から全日制に移行しつつある)この2つが、多くの子どもがスポーツを楽しめる環境を作り出したのでしょう。しかし、日本の子どもの方が体育の授業で運動をするため、スポーツをする時間や機会は多いのではないかと考えている。

青少年や大人のスポーツ環境

青少年や大人で比較すると、日本よりドイツの方がスポーツをする機会が断然多い。その要因としては2つ考えられる。

1つ目は、日本では中学校や高校の1年生は多くの生徒がクラブ活動に参加するが、途中で他のスポーツを行いたいと考えても、2年生からや学年の途中から他のクラブ活動に参加することが難しいことがあげられる。単に参加(籍を置く)することは可能であるが、クラブ活動は「〇〇大会に出る」など勝つことを目標にしているからである。一度クラブ活動を止めると、そこでスポーツとは縁が切れてしまうのである。

ドイツでも勝ちにこだわると思われるが、スポーツをする人が全員楽しめるように1部、2部、3部・・力量に合った楽しみ方ができる。日本の場合、補欠の人は試合に出場できないが、ドイツでは補欠の人は2部で楽しめば良いと考えるのではないか。それ故にスポーツを継続できていると思う。

2つ目として、日本では大人の場合、休みの日は仕事の疲れを取る「体を休める日」であるという考え方があったためである。また、スポーツに参加するために休暇届けを提出するという事に罪悪感を持ってしまうからでしょう。ドイツでは1カ月間の休暇を取得でき、ボランティア活動も活発である。その為にスポーツを自ら楽しむことや、指導をする人が多数いるものと思う。

高齢者のスポーツ環境

「会員資格は、60歳以上」というクラブがあった。日本の各自治会にある“老人会”と同じ縛りである。ドイツでは60歳からでもスポーツクラブに入

会するのに、日本では(入会率は低いが、)親睦が主体の活動(スポーツもあるが)に入会する。スポーツをすることが健康の保持増進につながるということであれば、日本は世界一の長寿国家のため、一番スポーツをしていることになるであろう。しかし、日本のスポーツ人口はドイツに比べて低いのが実態である。長寿=健康と捉えれば、「もっと運動しましょう!」と言わなくても良いと思うが、体の健康以外に精神(心)の健康の為に運動を推奨していきたいと思う。

クラブハウスにはお酒を飲む場所がある。ドイツではビールが好きなのか、または話をするのが好きなのか?日本では、会社の帰りに会社の仲間と一緒にお酒を飲むことが多いが、ドイツでは会社の帰りにお酒を飲むことはほとんどしないとの事であった。運動の後にビールを飲みながら、コミュニケーションを図ることが好きなのであろう。酔っぱらうためにお酒を飲む日本とは違うのだなと感じた。

ドイツ研修で一番感じたこと

視察したクラブの会員は皆がクラブライフを楽しんでいたと思う。ドイツのスポーツクラブのように、歴史があり会員数が多いクラブの運営方法やシステムを、設立1年目で会員が数百人しかないクラブにそのまま活かすことは難しいと思う。

しかし、今後は会員が各教室に参加し、そのスポーツの技術・能力を高めるのが目的ではなく、クラブ会員同志で時間を共有する楽しみを見出せるような運営・企画をしていきたいと強く思った。楽しければ教室に多く参加するようになり、必然的に能力も身に付き健康にも繋がると確信している。

団員：下澤 弘嘉

白馬総合型地域スポーツクラブ
会長（兼クラブマネジャー）

はじめに

「『健康・癒し・学び』をテーマに白馬の自然の中で子どもから高(幸)齢者までレクリエーションスポーツを！」をスローガンに掲げ、クラブ設立のための準備から運営に携わって5年目を迎えた。その間、様々な問題や課題に直面し、日々思い悩みながら活動する中で100年以上の歴史と伝統があるドイツのスポーツクラブの現状を視察することで、新たな展開が見出せるのではないかという思いからクラブマネジement指導者海外研修事業に参加した。そして、この機会にドイツにおけるスポーツクラブの歴史、運営のノウハウとシステム、現状の課題と問題などについて学び、今後のクラブの取り組みに向けてのヒントを得て地域のメリットに繋がるスポーツ振興を目指したいと考え視察研修に臨んだ。

ドイツクラブの歴史と現状

1817年に最初のクラブ「ハンブルク体操クラブ」が誕生して以来、長い歴史に培われたドイツのスポーツクラブ、その中であって100年以上の伝統を持つクラブも少なくない。ドイツの国民スポーツは、法律を基盤として地域のスポーツを中心に普及・発展してきた。戦後、1960年に地域におけるスポーツ施設の建設を推進したハードに関する施策「ゴールドプラン」がスタートし、国民のスポーツに対する考え方の変化の中で誰もが行えるスポーツ振興を目指したソフトに関する施策「第二の道」として生涯スポーツの推進が図られた。これによりドイツ国内において各地区にスポーツクラブが設立され専門スポーツのみならず高齢者・障害者もスポーツを謳歌している。2006年の調査では、約9万のクラブが利益を目的とせ



ず公益的存在として活動し、会員数100人未満の小規模クラブから1,000人以上の大規模クラブにおける会員総数は約2,730万人である。そのスポーツクラブは単一種目から設立し、次第に複数のスポーツ種目を提供する多種目型に移行してきており、子どもから高齢者まで同じクラブに所属してスポーツを生活の一部として楽しんでいる。ドイツのスポーツクラブの多くは、非営利法人として登録し会員の意思に従って自律的に活動し、自由意志に基づいて決定し、諸問題を会員の創意工夫で解決している。

また、余暇時間を利用してクラブの運営や指導にあたるボランティアの存在があり、こうした人々がドイツのスポーツクラブを支えている。

さらに活動の拠点としてのクラブハウスの存在がスポーツクラブのコミュニティ（社交の場）となっている。しかし、その一方でドイツのスポーツクラブは今、組織に属さず自由にスポーツを楽しむ人が増え、クラブ離れといった問題に直面しクラブとして存続していく為には、住民の要求にあったプログラムなど質の高いサービスの提供と、運営には不可欠なボランティアの確保が課題であるとの指摘もあった。

講義研修を通して

クラブ運営におけるシステムについて、我々のクラブとして参考にしたい事例を幾つかあげてみた。

- ①ライン・ノイス郡の生涯スポーツ振興のプロジェクトとして、役所内に市民スポーツ相談課を設置しケルンスポーツ大学と提携し、それぞれのスポーツクラブをオンラインで結びクラブ運営の軽減化を図るとともに住民がスポーツクラブに対してどのような変化を求めているのか、ボランティアの育成をどうするのかなど、住民のスポーツと健康に関する有益な情報の提供をおこなっており、行政・大学・スポーツクラブの連携による支援体制に注目をした。こういったシステムは、今後我々のクラブが抱えるであろう様々な問題や課題に取り組む上での解決の糸口として活用していきたい。
- ②健康志向のプログラム提供についての取組みとして、医者・理学療法士・保険会社などと連携し、健康に関するプログラムを提供するコースとして、心臓循環系のリハビリ、子ども達の姿勢運動系、ストレスの克服、高齢者の健康促進、青少年の健康促進などのコースを企画し、州のスポーツ連盟が認めれば保険会社から助成が受けられるシステムは、医療費などの社会的コストの削減に貢献するとともに、今後のクラブの将来性を高めるのに有効的な手だてであることが理解できた。今後は、医療機関の専門家にアドバイスをいただき、健康に関するプログラムを開催していきたい。
- ③ドイツの学校システムは半日制により授業は午前中に終了し、午後は地域のクラブで活動していたが、家庭環境の変化や学力向上のための打開策として、現在は全日制に移行傾向にあり午後の活動として通常の授業だけではなくスポーツ・音楽・美術など選択制で実施されるようになってきている。傾向として学校を終えてスポーツクラブで活動する子ども達が減少してきており、学校に留まってさま

ざまな活動をする子ども達が増えてきている。このことから、スポーツクラブ側が現在の変化を踏まえて積極的に学校側へ働きかけをおこなってクラブへの加入率の向上を図っている。我が国では放課後に社会体育でおこなうスポーツ少年団の活動があり、そこに属さない子ども達の受け皿として、ドイツにおけるスポーツクラブと学校が連携することによる円滑な運営を図るための協力体制は参考にしたい。そして今、我々の地域で起こっている子ども達のスポーツ問題や、健全育成のための解決策としての総合型クラブが果たす役割は大きく、地域における社会スポーツのシステムを見直す必要性を感じた。

クラブを視察して

最初の訪問先であるシニア世代スポーツクラブは【人生は運動】をスローガンに、各種体操・ヨガ・水泳・ケーゲル・バレーボール・心臓疾患者のリハビリや、頭の体操としてカードゲームなどの活動をおこなっていた。中でも心臓・循環器系などのリハビリは専門の資格があるコーチのもとで各自の負荷能力に適した運動処方を提供し、さらに医師が付添い必要な医療機器を持参し、処置に当たっているとのこと。これらのプログラムはドイツのスポーツクラブの多くが提供しており、単なるスポーツをおこなう組織ではなく地域社会が抱える様々な社会問題や生活課題の解決にも寄与する公益性の高いクラブとして重要なポジションを担っていることに感心させられた。

次の日、TUSグレーベンプロイヒを視察した際、クラブハウス内にはクラブエンブレム、記念のペナントや写真が数多く飾られてあり、スポーツクラブが会員との一体感や所属意識に支えられ発展してきたことがうかがえた。

また、クラブハウス内のカウンターにはビールサーバーが設置してあり、運動で汗を流した後にビールを飲みながら歓談することは、コミュニティづくりに欠くことのできない空間であり、精神面の健康にも結びついているのではないかと思ひ、その重要性を感じた。

同じ日の夕方訪問したオルケン体操クラブでは、大・小体育館などの施設をクラブの会員の手づくりと自主財源で建設し、敷地も数年前に行政より買い受けクラブが所有しているとのこと。このことはクラブ会員であるボランティアが多くの時間と労力を費やした成果であり、ここにクラブづくりの原点を垣間見ることができ感動をうけた。また、スポーツ教室だけではなく、会員によるコンサートや交流パーティーなどの文化行事も開催され、まさに地域に密着したクラブ運営がなされていた。

研修3日目に訪問したTSVバイヤードルマーゲンは、会員数が約5,000人の大型クラブであり、製薬会社であるバイヤー社から譲り受けた施設は、全天候の陸上競技場（400mトラック）・室内練習場・多目的施設・温水プールなどがあり、その充実した環境に圧倒させられた。バイヤー社がクラブを支援する理由の一つとして、社員の健康を維持することで会社の経費を抑えることができるとのこと。設立から100年近い年月をかけて現在のクラブを創りあげたとのことをお話を聞き、我がクラブも可能性を信じ前向きにトライしていきたいと思う。

今後の活動に向けた感想

ドイツの長い歴史のなかで生まれたスポーツ文化を学び、これからのクラブ運営は地域の住民が担い手となり、与えられるのではなく自ら考え創り出すことが大切であることが理解できた。そして、そのためには地域の様々な行事への積極的な参加など、地域社会と関わることに意義があり、単なるスポーツクラブという位置付けを超えたコミュニティとしての役割を持つことが重要であると思った。また、法人格を取得することによって社会的な信用を得ると同時に、クラブとして地域社会に対する責任も生まれ、地域と一体となった社会づくり・人づくりにつながる取り組みができるのではないかと感じた。今後は、地域・学校・行政と連携し社会公益性の高いクラブとして地域における生涯スポーツの振興を図り、活力あるまちづくりを推進する団体として活動の場を広げたいと考えている。

最後に、今回の研修事業に際し、ご尽力いただいた関係者の皆様に厚く御礼と感謝を申し上げます。そして、派遣団のメンバーの皆様には視察研修中大変お世話になりました。

またお会いできる日を楽しみにしております。

団員：杉山 克秀

総合型地域スポーツクラブ『TAC』
理事、代表指導者、マネジャー

私自身は学生時代にテニスの競技をしていたが、働き始めて、運動する機会を失った。20代半ば、少し仕事に慣れ、余裕が出来た頃、同級生の仲間で軟式野球チームを作り、野球連盟に所属して日曜日のたびに汗を流していた。平成15年に中学校のPTA会長を務めさせて頂いた後は、地域の活動に盛んに参加する機会を得た。それを機に体育指導委員に任命され、総合型地域スポーツクラブのを知るようになった。そして、体育指導委員を対象にした地域スポーツクラブの研修会があった頃、静岡県富士市内で現在私が所属する『TAC』が平成17年3月に設立された。発足当時は会員として参加し、スタッフのサポートをしていた。その年、文部科学省の平成17年度総合型地域スポーツクラブマネジャー養成講習会を9月21日～25日と翌年2月23日～26日受講した。今考えると仕事も休んでよく受講したと思っている。次の年から、正式に『TAC』のスタッフとして加わり、現在も指導と運営に携わっている。体育指導委員としての関わりは全くありませんでした。

その翌年の第1回全国スポーツクラブ会議(2007年5月26日・27日)に参加し、同じマネジャー養成講習会を受けた仲間たちにお会いする機会を持ち、皆さんが頑張っていることが励みとなり、頑張りが続けることが出来ていると思っている。

ドイツ行きの案内が静岡県体育協会より届き、『ドイツか』、私には関係ないとばかりに思っていた。ふとよく読んでみると誰でも行けるわけでない、選ばれた人でないとだめなのだと読み取れた。何気なしに、静岡県体育協会クラブ育成アドバイザーの海野さんに問い合わせると私には資格があることが判った。海野さんは平成17年の総合型地域スポーツクラブマネジャー養成講習会で一緒にさせて頂き、それ以来、弱小クラブの『TAC』



向かって左から案内と講師を務めていただいた
ライン・ノイス郡スポーツ相談課の
アクセル・ベッカーさん、通訳の松尾さん、私、
日本体育協会の佐野さん(背景は炭鉱です)

マネジャーとしてもお付き合いしていただいている。しかし、休みも取れそうもないし、費用もかかるし、と思っていると家内が一生懸命スポーツクラブのことに取り組んでいるから『ご褒美だよ』と言って、参加することを了承してくれた。仕事も休みを取得し、後は、審査を受け、選ばれるのを待った。

平成23年9月の事前研修会で参加する方々と会うことが出来、やはり『スポーツ系』。楽しく、ドイツへ行って学んでこられる自信がついた。今までマネジャー研修会で、ドイツのクラブ紹介を何度も見てきた。きっといい経験と自分のクラブ運営にもプラスになると信じた。

ドイツで感じたことといえば、ドイツ人は大きい。「この大きさは大陸だから?」「たくさん食べるから?」「国民としての特徴?」といったことである。とにかく食事は多く、ひとつひとつが大きく、味が濃い。講義、視察の中でも健康と運動が話題としてあがり、肥満の子どもの多いとのことである。これらは絶対起こりえることと思う。

もっと、食生活の改善をすべきだと思う。(他人事ではないが・・・)

クラブ視察での食事の際にはにこやかであるが、基本的にあまり笑うしぐさが少なく、勤勉で派手さがなく、服装も色が濃く、派手な柄はあまり見受けなかった。街の夜は暗く、日本のような外灯は少なく、夜はひっそりとしていた。建物もけばけばしくなく、落ち着いた面持ちでどっしりした感じである。横断歩道で立っていると車は殆ど停車してくれた。すごく真面目で印象はよかった。堅実な国民と感じた。日本人としては相性が合うのではないかと思う。

ドイツの学校が半日制から全日制となり、会員数の減少やそれに伴う活動場所の確保が難しくなったことなどいろいろ課題があることが講義でわかった。視察研修に伺ったクラブはたぶん恵まれているところであると思う。日本のマネジャー研修会でもやはり会員数の多いクラブ運営を行っているところや特徴ある運営をしているクラブが紹介されたりすることと同じであると思う。また、ドイツでも学校の体育館を使って活動するクラブや会員数が少ないクラブもあり、運営に行き詰まるクラブが、合併や統合することもあることがわかった。日本に見る課題と似ている感じもした。クラブ運営はボランティアが付き物であるが、決してそのことで甘えることがあってはならない、企業運営と同じで会員へのサービス、スタッフの管理、活動施設の管理、運営、確保が重要である。ドイツでも日本でも同じことである。ドイツの大きな課題として全日制的の話が多く聞かれたが、日本ではもともと全日制的であるので気にはならないと感じるが、全日制に変わったことで会員離れが起り、会員を確保するために学校との連携をしたり、学校へクラブのスタッフを派遣したりする。日本でも同様の取り組みを行っているが、見つめなおす必要があると考えている。日本のスポーツクラブの中には、既存のスポーツ少年団を会員としたり、学校と連携する中で子ども達が会員になったりするところがある。会員数は増えるが、参加者意識が強くクラブの一員としての意識が少ないように思う。はたしてそれがクラブ運営であ

るか疑問であると感じた。

日本では中学、高校の部活動が主体で教育とスポーツの結び付きが大きい。しかし、少子高齢化が進み、スポーツ少年団や中学の部活動は、限られたスポーツ(サッカーや野球など人気のあるもの)に集約され、出来るスポーツが限られ、スポーツを選べなくなっている。教育とスポーツの環境が変わり始めている。それを補うために地域スポーツクラブの関わりが重要になっている。ドイツの各クラブを訪問し、各クラブが特徴ある運営を行っていることがはっきりと感じ取れた。ドイツは憲法でスポーツをすることを定めていることから言えるように、行政のサポートが非常に厚く感じた。同時にドイツでも財政難であることは日本同様であり、自主運営、企業サポートをどのように受けるかが課題となっていた。クラブの運営について優秀な指導員は有給であることは日本と同様であるが、それを支える役員の方々はボランティアであることがわかり、私自身は『ホッ』とした。企業からのサポートはドイツでも減り、同時にサポートする企業側のメリットを考えることが今まで以上に重要であることは日本と同様であった。私が所属するクラブは現在、行政からの補助金等は一切受けないで自主運営を行なっている。(但し、委託事業としてスポーツ教室を受託することはある。)その為、私が所属するクラブにとって企業からの施設の優先利用やスポーツ大会などの助成は重要になる。企業のメリットを追究し、助成していただく方法として「TSVバイヤードルマーゲン」の企業との連携はクラブの運営方法として参考になった。これは財政支援と会員獲得ということ両方から言えると感じた。私自身前から思い描いていることが現実にあることを確認できた。現在、自分のクラブが企業に抱っこされた状態であるが、協力して頂いている企業にメリットを示すことを早急にしなければならぬと感じた。ドイツのスポーツクラブの運営とスタッフ(指導者、マネジャー)の関わり方がどのようになっているのか、住民の勧誘を高めるマネジメントについてもっと知りたかった。

「コルシェンブロイヒ シニア世代スポーツクラ

ブ」では、魅力あるクラブは住民の意識とスタッフの魅力によって引き出されると感じた。スポーツには福祉的要素が存在していると私は考えている。スポーツは自身が競技するだけでなく、競技を見て、喜び、騒ぎ、感動し、興奮し、応援することもスポーツに参加していると考ええる。スポーツは高齢化社会では健康で有り続けるための栄養素であり、社会と結びつける社交場であると考ええる。誰もが健康で生き続ける環境の場としてスポーツを提供することが大切だと実感した。

ドイツでは「TSVバイヤードルマーゲン」のようにトップアスリートを育てるクラブと「コルシエンプロイヒ シニア世代スポーツクラブ」のように高齢者が集まったクラブ、「TUSグレーベンプロイヒ」、「BVヴェックホーフエン」のサッカーを主体で、ユース部門を育成しているクラブ、「オルケン体操クラブ」のような部活動の延長のようなクラブの視察をすることが出来た。それぞれ特徴あるクラブばかりである。言い換えればオールマイティーのようなクラブは存在しにくいと改めて感じた。日本のマネジャー研修会を受ける中で、トップアスリートも育成しなければならない、子どもたちの肥満対策も、高齢者の健康の為の軽スポーツも、などいろいろ考えることが

必要だと考えていたが、ある部門に専念し、他のクラブと連携をとる方法もよいのではないかと痛感した。あまりにも総合型の概念に惑わされていたように思える。

『TAC』の7年間のクラブ運営は施設探しの連続だった。発足して3ヵ月後に公的施設の管理者が変わって追い出しの目にあった。活動場所を探して、私設の体育館を利用。現在は富士常葉大学の体育館を利用させて頂き、大変安定した場所の確保とともに大学生のサポートを受け、充実しつつある。これからは、大学との連携を進めるとともに地域連携と企業連携を図り、総合型地域スポーツクラブとしての活動を改めて考えなければならないと感じた。それは生き残ることではなく、クラブがなぜ存在し、住民に何を提供し、何を残すのかを私自身改めて再考したいと感じた。

最後にドイツ研修で一緒だった団員の皆様に対し、足をケガし、ギブスを付けたまま参加させて頂いたことにお礼を、またご心配をお掛けしたことをお詫び申し上げます。また、縁が出来たことを有難く思います。今後は、お互い、切磋琢磨し、情報交換できればと思っています。

団員：前田 晃

網野スポーツクラブ クラブマネジャー

私が平成16年からスポーツクラブに関わり始め、今年で8年目。京都府の北に位置する、京丹後市網野町、日本海に面した自然豊かな街にある、網野スポーツクラブで活動している。こんな田舎のクラブからドイツへ海外研修に参加できるとは思っても見なかった。チーフマネジャーから、「申し込んでおけよ」の一言が今回の始まり。

事前研修会に参加し、ますます、事の重大さに気づき「やってしまった!」。しかし、そこで開き直り、「何とかなるさ!」の精神で覚悟を決めた。さて、ドイツの国、歴史、ましてスポーツクラブも事前研修会で学んだことくらいで、わが町を離れ遠くドイツの地へ到着し、バスの窓越しに見る街並みはヨーロッパという私のイメージ通りだ。研修会場へ徒歩で向かうことができ、街の雰囲気も味わえて、これもまた研修だ。

講義、初日が始まり、ドイツのスポーツとスポーツクラブ、歴史にふれ、約200年前から始まったスポーツクラブから今日までの生活スタイル、子どもたちの変化、スポーツの捉え方とさまざまに進んできたことを学ぶ。今回お世話になる、講師でありプロデュースしていただいた、アクセル・ベッカー氏からライン・ノイス郡のスポーツの講義を聞き、地域ならではの話、行政として地域スポーツクラブの支援を含めた活動とこれからの郡地域のスポーツクラブの問題解決策を聞く。続けて自治体のスポーツ振興としてコンシェルブロイヒ市のスポーツ課長からクラブの実情ならびに市のクラブへの支援など細かなところまで聞いた。講義を聞く中で、ドイツの国、州、郡、市とスポーツクラブを取り巻く話を自分たちの日本におけるクラブの事情にも置き換えていた。

講義、2日目は、ライン・ノイス郡の副郡長、ライン・ノイス郡スポーツ連盟理事長、そして日本領事館の主席領事の表敬訪問を受け、身の引き



締まる思いがした。講義では現在の社会とスポーツクラブの問題点を聞きながら具体的対策、取り組みを学ぶ。ドイツでも私の周りで起こっていることが数々あり大変参考になった。特に健康志向については日本でも早くから始まっており、興味深い講義であった。学校問題はここへ来て初めてドイツの教育について学び、日本のゆとり教育と正反対の半日制から全日制への転換。学校でのスポーツ活動が少ないこと、全日制への転換によるクラブ運営に影響を及ぼす会員減少の問題は大変深刻であった。会員確保はクラブの存続に重大な影響を及ぼすことであることは同じである。少子高齢化の世の中で世代に合った取り組みと対応が本当に必要不可欠となっていると思う。そこへ向かった活動がクラブと行政の二輪での健康とスポーツへの取り組みだと考える。

講義、3日目はTSVバイヤードルマーゲンへ訪問、バイヤー社に支援を受けて運営するクラブ。それは立派な施設を見学した後、現在の学校とスポーツクラブの取り組みを聞いた。TSVバイヤードルマーゲンのコンセプトに分野を超えたサービス提供、ナショナルレベルの競技種目の育成、学校と連携した子ども育成。そこに寄宿制の導入、指導者の学校派遣、学習の補修教育とさまざまな

企画を展開することで子どもの会員の確保に努め、育成し、一流選手を育てあげる。ひいては地域スポーツクラブの存在をアピールし、多方面からの支援、協力を得ることにより財源も確保に努める施策を講じる。大きなクラブのお手本だ。現在の経済状況の中、企業スポンサーを持つこと、サポートを得ることは大変であると思う。継続していく事も大変であり、そこへのプログラムの展開も大切なことを一緒に学んだ。

クラブ訪問ではシニア世代スポーツクラブとTSUグレーベンプロイヒとオルケン体操クラブ、TSVバイヤードルマーゲンとBVヴェックホーフェンの5箇所を訪れた。シニア世代スポーツクラブではケーキをいただきながら高齢者のプログラムを聞き、準備してきたよさこいを披露。音楽のトラブルがあったが、楽しく交流、その後もケーゲルを楽しみながら夕食を一緒に。翌日もオルケン体操クラブへ行き、実際の活動を見学（体操など）、クラブの皆さんと夕食懇親会。昨日のよさこいの失敗を取り戻すかのように、皆で張り切って踊り、歌う。言葉こそ通じないが、有意義な夜

を過ごした。その他のクラブはやはり、ドイツの伝統を持つクラブであり、立派なクラブハウスで重みも感じながら貴重な話を聞かせてもらった。（これぞ、ドイツのスポーツクラブ！）ドイツの中での地域クラブは本当になくてはならない大切なものだということを感じた。そんな地域の方々に愛されるクラブを私も創ってみたい。

研修を終え、1週間の中、講義に視察、交流を通してドイツにおける地域行政、クラブの組織、運営、財政、そして歴史と学んだことは多く、実際に目にしたこと、体験したことは私の財産となったことは確かだ。日本とドイツと国は異なるが、問題は同じところにあるようだ。その問題解決に、今以上の交流の中でお互い解決の道を導ければと思う。伊端団長をはじめ、団員の皆様、日本体育協会、ドイツでお世話になったベッカー氏、現地の講師の方々、クラブの皆さん、通訳の多田氏、松尾氏に感謝、感謝です。

私は地元京都のスポーツクラブ関係者にこの経験を伝え、地域スポーツクラブの発展に努めて行きたいと思う。

団員：川崎 香織

NPO法人川西スポーツクラブ
理事・会計

はじめ

平成17年、奈良の川西町に「総合型地域スポーツクラブ設立準備委員会を立ち上げるので、町の代表者としてご参加ください。」と書かれた手紙がポストに。

当時、たまたま輪番で子ども連合会の会長の役についていた私には、「体育協会?」「総合型地域スポーツクラブ?」と何もわからないままに参加した。町の老人会、婦人会、子ども会、各小学校の校長先生や町の体育協会役員に教育委員会のメンバー約60人が集まり、月4回の会議に出席。部会を構成し事務局の手伝いをちょこちょこしてからは、「暇ですか?」「空いていますか?」の町職員の電話攻勢や飲み会のお誘いで、気がつけば常任理事の肩書がついて会計担当として事務局をみることになり、とうとうクラブマネジャーの資格まで取得していた。そう、すっかりボランティアの壺にはまってしまったのだ。勉強は、大変だったが、いろいろな人との出会い、いろいろな事を吸収して、自分達のスポーツクラブに持ち帰り、地域の皆さんに話題として楽しく話すという事が、今日の充実したクラブに繋がっていったと思う。

広島で開催されたクラブマネジャーの研修会に参加して驚いたのは、「古い体質の人材は要りません。今、必要なのは、新しい人材です。」と組織の形骸化と、日本特有の名誉職について、講師の先生がはっきりと切ったことだった。この言葉の言わんとする事は、ドイツのスポーツクラブの研修と見学の中で、おのずと解けて行った。

ドイツ研修を希望したのも大きな好奇心と情報収集、素敵な人たちとの出会い。と飲みみにケーション。



事前研修

福島大学の黒須教授の講義に昨年ドイツ研修に参加された先輩からの講演。全国から素敵な人たちが集まり、いろいろ根ほり葉ほり聞かせてもらい、人脈ができて、うれしかった。「ドイツでお世話になるからには、何かご披露して」と、私自身、趣味の日本刀で演武を考えたが、日本刀の取り扱いがややこしいので断念。個人プレーより団体プレー。今回、一緒に参加する高知の若藤さんと、島根の金山さんにメールして女性陣で企画し、「どっこいよさこい」を用意した。結団式の後に全員でリハーサルをして「いざドイツ研修に。」

ドイツでは

成田を出発しフランクフルトを経由してデュッセルドルフ空港に到着。空港での迎えにはアクセル・ベッカー氏と通訳の松尾さん。次の日からは、通訳の多田さんが参加して私達の世話をしてくださった。さて、ベンツのバスから初めて見るドイツ光景に見入ってしまった私。お城のような建物にヘンゼルとグレーテルの本で見たイラストのお菓子の家が、建ち並び、窓には花が飾られていた。

グレーンブローイヒの朝市のおじさんやおばさん達はたいへん親切で、「モルゲン」のあいさつに「これは、何？」指さすと丁寧にドイツ語で答えてくれた。

ドイツの講義会場では、かならずコーヒーやお茶。リンゴジュースに炭酸水が用意され、クラブ視察では、飲み物の他にケーキなどのお菓子があり「おもてなし」を受けた。5つのクラブには、かならず人がゆっくりとできるスペースがある。カウンター付きのカフェテリア。ドイツでは、クラブが人と人とのコミュニティの場所で、地域のことや政治的なことも話し合われる。そういえば日本も「寄り合い」文化があるが、近年は、薄れてなくなりつつある。ドイツでも飲酒運転は、当然駄目である。週末は、公共の電車は終日走り、乗合タクシーもある。観察してみるとドイツ人は、ビールをがぶがぶ飲まず、レストランでビールをガバガバ飲んでいたのは、日本人の我々だけであった。

コルシエルブローイヒのシニア世代スポーツクラブやオルケン体操クラブでは、視察のあとの夕食会で、「どっこいよさこい」を全員で披露し、歓迎された。また一緒に踊っていただいた。言葉はわからねど、ボディランゲージで心より楽しんだ。ドイツの方々「ありがとう。」

ドイツのクラブ事情

どのクラブも100年以上の歴史があり伝統があるが、現在は、競技スポーツだけではなく多様に変化する社会のニーズに合わせて、健康のためのスポーツ・体型など美的のためのスポーツ・個人の楽しみのためのスポーツなどを取り入れるクラブも多い。しかし手法は、クラブによって様々で、地域にあわせて変化している。行政や企業、保険会社などのスポンサーのバックアップがあるが、世界的に先進国の間で財政困難となりつつある国が増える中、ドイツも例外ではなく、少子高齢化と合わせて問題になっている。とにかくスポンサーからお金がなかなか出ない。会費は、どのクラブも安価である。会費収入で補うとなれば、会員数を増すか、会費を値上げするかの選択になる。

その上、基礎学校（日本の小学校）の全日制が導入され、昼からはスポーツクラブを利用していた子ども達が激減。それぞれのクラブが地域の学校を訪問して学校との連携を図ろうとしている。ドイツのクラブは、ほぼボランティアで運営されている。自分の余暇をボランティアに使うのだ。ところが、今、個人主義が強くなり、ボランティアをしない子どもたちが増えている。

行政としてもいろいろ勘案している。それぞれの村にある形骸化したクラブをまとめて、事務局を一つにしての経営化を図ろうとしたり、会費を統一して、相互扶助の精神での運営を考えたり、青少年にいかにしてボランティアを動機付けして、マンパワーを増やすのかを。すばらしい芝生のグラウンドを維持管理する苦勞を「芝生に穴をあけないようにプレーする事を指導しています。」とジョークで返していたクラブの事務局長の顔が浮かぶ。

研修を終えて

視察に行ったドイツのクラブは、それぞれの地域で淘汰されたクラブであっても日々変化している。ドイツにあってドイツにあらず。日本の我々のクラブ事情と、全く変わらない。「楽しく」・ドイツのクラブのボランティアの皆さんは楽しいからするのだと教えてくれた。何だか仕事のように責任ばかりが覆いかぶさり少々お疲れぎみの私の心にほっとするものを感じさせてくれた。各クラブのかかえる問題は「人」の力。金・物は、きつと後からでもついてくるツール。ドイツ研修に参加して、自分の中の総合型地域スポーツクラブが見えてきた。私は、この研修で学び、感じとった事を地域に持ち帰り多くの人に話をしたい。自分達の地域のスポーツクラブをいかに根づかせ生活の中に密着させていくのかを。

今回、研修と一緒に参加したメンバーの皆さん、奈良県体育協会の皆さん、ドイツでお世話になった講師の先生やクラブの皆さん、日体協の佐野さん、通訳の多田さん、松尾さん、そしてケルンスポーツ大学のリットナー教授とアクセル・ベッカー氏に心から感謝します。「ありがとう」

団員：金山 恵美子

NPO法人SPORTIVOひがしいずも
クラブマネジャー

はじめに

私は平成に入った頃より、町の教育委員会の嘱託職員として、社会体育の担当及び指導員として、地域の方々のスポーツ活動や運動に直接携わっていた。平成13年頃より、将来、我が町でも総合型地域スポーツクラブを立ち上げようと、文科省のクラブマネジャー講習会や県のスポーツ課主催の講習会、体育指導委員の関係研修等で、数多く勉強をしてきた。その間、「ドイツのスポーツクラブをモデルに日本でもスポーツクラブを・・・。クラブハウスでビールを飲みながら、子ども達のプレーを見て・・・」等、ドイツのスポーツクラブを視察された方からの報告やクラブの概要を聞く機会もあった。こんなクラブを私たちの町にも欲しいと思っていた。

実際に私の町のクラブを立ち上げるまでは、10年という長い道のりで大変であったが、やっと平成23年3月に設立することができた。この年、日本体育協会公認クラブマネジャーの資格も取得し、設立と共にクラブマネジャーとして運営に、そして指導者としてクラブの会員確保に力を注いでいる。

そんな時、ドイツのクラブ視察研修があることを知り、歴史あるドイツのスポーツクラブを見て聞いて帰りたいと・・・。幸運なことに、研修の団員に選ばれ視察へ向かうことができた。

ドイツのスポーツクラブ

視察したクラブでは、創立100年を越すクラブがあり、サッカー・体育館・プールなどのスポーツ施設はもとより、クラブハウスを持って会員のコミュニケーションを図ることができる素敵なクラブを視察することができた。



その中で、自分が考えていたドイツのスポーツクラブと実際見聞きしたスポーツクラブとの違いは、最近ではサッカー・体操・フェンシング・水泳等の競技スポーツを中心としたクラブだけではないと言う事であった。

講義や視察の中で、ドイツでも少子高齢化の為、ターゲットを子どもだけでなく高齢者に向けていけないといけなくなった事、クラブが資金確保や会員確保の為、企業の従業員に健康で働ける体を維持する講座を提供したり、身体に障害を抱えてしまった方へのリハビリの講座を提供したり等、数多くの健康志向のコースをクラブに取り入れようとしていることを知った。

我がクラブも、『健康』をキーワードにメタボ対策や運動不足対策のスクール講座を中心に会員を募集し活動をしているため、興味が湧いた。

今までスポーツをする目標は、運動能力を高めることが大きかったクラブも、現在は運動を通して生活スタイルを変えていく事が大切で、健康志向のコースを考えていく指導者が重要になっているようである。

健康志向コースがクラブにもたらす考え方やチャンスとして、

・少子化や小学校の全日制導入により、子どもの

会員確保が厳しくなったクラブにおいて、新たな会員獲得や確保の為に、競技スポーツではなく健康へ目を向けることは大切である。

- ・高齢者は、新しいターゲットとして大きなカギになる。

例えば、お金に余裕がある人々と生活ぎりぎりの人々がいるが、その中で年齢だけで区切るのではなく、人々がどのような状況におかれているかによって、提供するプログラムを考えた方が良い。

- ・日本のメタボ対策のように、ドイツでも現代社会の状況に合わせたプログラムをアピールすることができる。
- ・財政獲得の手段としては大きいですが、そのためにはビジネスプランが必要である。
- ・有資格スタッフの獲得によって、良いプログラムや企画及び指導ができる。医師や他の健康関連団体との協力が得られたら、いろいろなプログラムが考えられる。

例えば、クラブで健康志向のプログラムに参加すると参加費の一部を保険会社が負担してくれる。

- ・健康管理として、治療・リハビリ・ケア、もう1つの柱として予防があり、コストがかからない。リハビリの面からは、機能回復・日常能力を強化する運動があり、高齢者や障害を抱えた方にとっては椅子を使ったギムナスティックでもスポーツとみなす。
- ・『健康』の為に、目標をはっきりさせ、健康な身体の維持は自分自身の責任において行うことを自覚させる。

以上のようなことが挙げられる。

我がクラブでも将来このような考えを取り入れ、会員の健康管理のお手伝いをしていきたいと考えた。

クラブ視察

1日目の視察先は、高齢者を対象活動に行っているコルシエンプロイヒシニア世代スポーツクラブであった。年齢が高い会員をターゲットにしているため、ギムナスティック・心臓系のトレーニ

ングのプログラム・ヨガ・ノルディックウォーキング・ハイキング・ダンス・スイミングなど、健康志向のプログラムを行っている。また、一ヶ月に1回朝食会を開催して、会員だけでなく市民も招いて、一緒に朝食を取り講義も受け交流を図っている。イベントとしては、小旅行やレクリエーションなど企画されてもいる。視察後、ケーゲルをしながら懇親会を行った。

2日目は、始めにTUSグレーベンプロイヒを訪れた。サッカーを中心としたクラブで100年の歴史あるクラブである。初めは、サッカーだけのクラブであったが、ツウンクルスポーツクラブと1947年に合併しT-U-Sとなったそうである。この事により、老若男女関係なくスポーツをする機会や運動する機会を全ての方に提供するクラブへと再スタートしたとの事であった。

2ヶ所目は、オルケン体操クラブ。1896年に体操クラブとして発足したクラブで、市から敷地を借りて活動していたが、その後自主財源により土地を購入し、体育館も建設し、少しずつ施設充実を図り115年を越す歴史あるクラブとなった。

視察を終えた後、クラブハウスで懇親会を行った。日本派遣団からは、高知県から参加の若藤さんの指導でよさこいを披露した。そして、私のクラブのオリジナルソング「さくらビクス」で踊り、オルケン体操クラブの皆さんも一緒に踊ってくださった。お互いの国の歌を歌ったりして、楽しい時間を過ごす事ができた。

3日目は、1920年にサッカークラブと体操クラブが統合して始まったTSVバイヤードルマーゲンを訪れた。市の競技スポーツの拠点であるだけに、スポーツ施設は充実していた。資金面では、バイヤー社のサポートを受け、それに対してバイヤー社の従業員の健康のためのプログラムを提供することで、お互いが助け合っている。

このクラブが重点的に行っている事は、後継者を育成すること・若い子ども達の才能を見極め、より良い成績が上がるよう指導する事があげられ、これはこのクラブに残ってくれるようにする為でもある。この為にも、学校と連携し、子どもの指導を通し、タレント能力の発掘をしていくことが重要となる。

ここでは、寄宿舎で生活を共にし、スポーツ指導だけではなく勉強も教師によってサポートしている。

最後に

この研修を通して学んだ事は、必ずしもすぐに取り入れられる事ではないし、また国の実情や財政状況もかなり違うので、全てが参考になるとはいえないと思う。しかし、ドイツのスポーツクラブの歴史の中に流れる考え方やボランティア精神により、子ども達や地域スポーツ愛好者を支えて来た事はとても素晴らしい事である。この事はすぐにでも取り入れ、日本流のクラブに置き換え、また東出雲町の地域状況に合わせ『SPORTIVOひがしいずも』の理念を永く後世へと繋いでいきたいと思う。

また、この研修に参加した団員同士でも、それ

ぞれのクラブの話を知る機会もかなりあった。国内の先進クラブでも、日本流の素晴らしいクラブ運営をしておられるところもあったため、今後も連絡を取り合い、その地域に根付いたクラブ作りの参考にさせて頂きたいと思う。

最後に、念願だったドイツのスポーツクラブ視察を、団員として参加させて頂く機会を、与えて頂いた関係の皆様へ感謝します。ドイツでは、たくさんの講師陣・クラブの関係者、そして通訳、日本でも日本体育協会の担当者の方々、事前研修を含め大変お世話になりました。ありがとうございました。

今後は、この研修で学んだことを参考に、『SPORTIVOひがしいずも』のマネジメントは当然ですが、この8月に合併し町から市になったため、活動範囲も大きく地域のスポーツ活動を通して健康で明るい人々の集まる地域づくりを進めていきたいと思えます。

団員：若藤 美紀

清流クラブ池川
ゼネラルマネジャー

はじめに

総合型地域スポーツクラブとの出会いは、今から9年ほど前、県の教育委員会よりクラブをつくってみたいかということであった。私の住んでいる地域は、少子高齢化のすすんだ典型的な地域であり、地域人口2,000人余りと過疎化も進んでいた。このような地域でヨーロッパ生まれのスポーツクラブは、とても無理であり、「絶対につくれない!」と言っていた。ところが、町村合併に伴い、活動の場が失われてはいけないという思いから、この地域にあったスポーツクラブをつくらうという事で準備に入った。はじめると、スポーツ活動だけでなく、まちづくりへも夢が広がり、合併後も元気なまちでありたいという思いから、活動を続けている。

海外研修決定

数年前、総合型クラブに関する全国レベルの会議の席で、海外研修の話聞き、即「行きたい!」と思い、日本体育協会公認アシスタントマネジャーの資格を取ろうと考えた。海外研修というより海外に行き、地元の人と触れ合える機会をもちたいという思いが強かったのである。今まで、ドイツには2回演奏旅行をしており、音楽という視点から見たドイツ旅行の経験はあるが、今回はスポーツという視点から見たドイツということで、さらに興味が湧いてきた。海外研修の申込書兼経歴書を書きながら、ちょっと動機が不純かなと思いつつも「行きたい!」という強い思いがあった。

ドイツ派遣が決定し、クラブ内で報告をすると、「よかったね、でも難しいことをいいなよ」や「また、何かやろうとしなよ!」など、研修してくる



のはいいが、新しい活動や考え方などを採り入れないよという意見で、「せっかく行くのだから、研修より楽しんできいや!」と送り出してくれた。

私自身も、スポーツクラブ先進国のまねをしてもだめだから、基本的な考え方がわかればいい、それよりいっしょに行く全国のクラブ関係者との交流が図れ、今後の活動へつながればいいという思いが強かった。

それでも、出発までには、事前研修会でもらった本や資料をしっかりと読み、視察クラブについても・・・といろいろ考えていた。しかし、日本にいない間やドイツから帰ってからの仕事の段取り等をやっている間に、あっという間の出発となり、あわただしく荷づくりをし、この調子で大丈夫だろうかと思いつながりの出発となってしまった。

また、日本派遣団員からの「何か芸をしよう!」という提案に、つい乗ってしまい、「鳴子踊り」をすることとなったため、法被や鳴子・よさこいの音楽などをと準備しながら一番気になったのが、踊りをどうしようかという点である。しかし、私の性格は『あたってくださいろ』、あまり難しくてもダメなので、音楽に合わせて、鳴子を振ってもらうことにした。

ドイツ

フランクフルト空港へ降り立ち、“やっと来た！ドイツだ！”のワクワク感、この感じは今でも忘れられない。車で走っていると、BMW、アウディ等の外車をすごいなと見ていたが、ドイツでは当たり前である。でも、驚きは交差点。十字路ではなく丸くなっていて信号がない、交差点近くで減速し、お互いに譲り合いながら丸い道を走行し行きたい方へ曲がっていくのである。（なにか決まりはあるのかもしれないが・・・）また、信号があるところでも、それぞれの間隔が短く、すぐに変わるため急いで通り抜けようとする車がない。私はドイツの家の窓に飾っている花やオブジェ、また庭がとても大好きである。いろいろな花やオブジェを工夫して飾り、楽しんでいる。それぞれの家庭のあたたかさ、季節感を味わう心のゆとりを感じた。さらに、ハロウィンまえのため、各家々での飾り付けが違い、楽しませてもらった。

研修

ドイツでは、1817年にスポーツクラブが設立され、その歴史は、約200年である。その歴史が物語るように、各スポーツクラブには伝統があり、地域スポーツとしてのクラブの在り方や運営等が脈々と受け継がれ、地域だけでなく社会の中に確立されている。

スポーツの変遷とともに培われてきたスポーツクラブが今日のものである。しかし、今問題となっているのが、日本の小学校にあたる基幹学校が半日制から全日制となってきていることである。半日制であれば、午後に学校を開放してスポーツクラブとして活動したり、また近くのスポーツクラブに通ったりしていた。しかし、全日制となることで、スポーツクラブとしての従来通りの活動ができなくなっている。この長い歴史の中で、スポーツクラブを取り巻く環境は変わってきているだろうが、今がドイツのスポーツクラブにとっての過渡期ではないだろうか、今後どのようにかわって

いくのか見守りたいところである。

クラブを視察した際、クラブの施設が充実していることにさらに驚かされる。クラブハウスには、クラブのペナントやトロフィー、写真等が飾られ、クラブの歴史を物語っている。その中にカウンターがあり、ビールサーバーが完備され、会員の集いの場となっている。スポーツ施設は、お世辞にもきれいとは言えないが立派な体育館、きれいな芝生で、3～4面はとれるようなサッカー場など、どこも充実していた。このスポーツ施設については、クラブで所有しているところもあるが、ほとんどが町の所有しているものを無償で借りている。このようなスポーツクラブが、歩いて移動できるような距離の中にいくつかあるにも関わらず、施設が充実しているということは、すごいことだと思う。

研修をおえて

ドイツでの研修によって、発見や驚きだけでなく、クラブに関わっている人のパワーなど、熱い思いも伝わってきた。この思いは持ち帰り、活かさないといけないと感じている。

さらに、研修だけでなく、参加者の方々との交流も楽しみで、できるだけ皆さんと話をするように心がけていた。ドイツでの食事の重さから、早朝にウォーキングし、団員の方々と1時間程度いろいろな話をしながら歩いた。そこで、日本からの参加者の皆さんは、ドイツの皆さんの熱い思いにも負けない思いをもっていることがわかり、今後とも情報交換をしながら、クラブ運営や活動に活かしていきたいと感じている。

今回、参加させていただき、仕事やクラブの関係者の方々やいっしょに参加した皆さんにはいろいろ迷惑をおかけしましたが、本当によかったと思います。今後の活動において、「ドイツに行って良かった！」「ドイツの人々の思いや取り組みも我が町に活かせるはずだ！」という思いで頑張りたいと思っています。本当にありがとうございました。

団員：城野 和則

南関すこやかスポーツクラブ
クラブアドバイザー

はじめに

私のクラブは設立6年が経過し、そして私はクラブアドバイザーとしてクラブに携わっている。これから10年先に経営的に安定し、地域に根ざした活動をするクラブを作っていくために今回ドイツ研修に参加させていただいた。そのドイツのスポーツクラブは100年以上の歴史があり、その長い歴史の中でシステムも確立されている。その中でどのような現状と課題があり未来の展望を知り、今後の運営に生かすとともに日本独自のクラブ像を描き、行政と協働していく為にはどのように考えていかなければならないかを模索する研修となった。



なり違っている。子どもと地域スポーツクラブとの関係を理解する場合、学校教育課程の相違を知らなければドイツの特徴を知ることはできない。日本とドイツの大きな違いは、ドイツの小学校にあたる基礎学校4年生（9歳）のときに、人生の選択を迫られるということである。職人になるか、専門学校か職業学校に進学して高度な専門職に就くのか、あるいは総合大学へ進学するのかを決断しなければならず、こうした環境が、低年齢で人間力の形成が行われる要因になっているともいわれている。

さらに重要な違いは、2008年まで基礎学校では授業は午前中で終了していたということだ。

小学校には、体育の授業はあるが、ほとんど体を動かすような体育内容が多く、きちんとした内容のものはむしろ地域スポーツクラブで行われている。

ただ、今回の研修において、学校と地域スポーツクラブとの関係でドイツでも新たな動きが始まっているということを知ることが出来た。まず、教育政策では、各小学校間に予算をつけて学校間の特徴を出させ、相互に競争させることで教育効果の向上を狙うというものだ。

この要請に応えるかたちでクラブの活動を学校

研修を通じて

ドイツでは、ライン・ノイス郡スポーツ課のアクセル・ベッカー氏が帯同され、ドイツのスポーツ振興政策やクラブに関する歴史や現状・課題についてお話頂いた。

ドイツのスポーツ振興は、ハード面とソフト面から積極的に展開されてきた。

まず、ハード面での整備・拡大策は、「ゴールデンプラン」によって推進されてきた。

このプランは、人々の暮らしの中にスポーツを位置づけることで、社会生活の向上と健康づくりを推進することが強調され、社会生活におけるスポーツの意義と重要性に関する社会認識が急速に高められることとなったのである。また、ハード面でも地域におけるスポーツ施設の建設を進めていった。次に「第二の道」として地域スポーツクラブで数多くのスポーツ愛好者を育成した。

こうした発展の背景には、学校制度の違いもあると思う。ドイツの学校教育課程は、日本とはか

教育に取り入れているケースもある。日本の部活動にあたるものが始まりつつあると感じた。

また、印象に残っているのは、ドイツのほとんどの人々が日々の生活の中で様々な目的（健康増進、体力向上、フィットネスなど）でスポーツ・運動を楽しんでおり、生活の一部になっているところである。そしてスポーツクラブは自由意志で運営している。自由意志とは、クラブは自分たちのために必要なものならば、自分たちが努力していくということである。

そうした中で「ボランティア精神」という概念が浸透し、スポーツ文化として定着していると思った。

もちろんドイツにも少子高齢化、基礎学校の全日制への移行（2008年）、社会情勢の変化にともない様々な問題があるが、行政や関係機関が地域住民の健康づくりのためにそれぞれが上記の問題を共有している。

そして問題解決に向けた政策やクラブネットワーク構築が出来ており、組織が連携して取り組める体制になっていることに感心させられた。

まとめ

今後、我が国の行政は総合型地域スポーツクラブと協働、連携することにより、より良いパート

ナーシップを築き、公共の役割を総合型地域スポーツクラブが十分に果たすことで地域に根ざす活動をしていくことが大切だと思った。

その地域密着については、地域社会における福祉政策の支援をあげることができる。いわゆる地域住民のQuality of lifeの実現・支援する活動・役割である。

総合型地域スポーツクラブが「元気な人々が生活する」地域づくり「住民参加型の健康・福祉」の地域づくりの拠点機能を果たすことである。

歴史的に形成された日本スポーツ環境をドイツのような地域スポーツクラブに一挙に改変するというのは出来ないが、ドイツのクラブを参考にしながらも日本の風土や各地域の特性や実情にあった合理的な運営システムやクラブシステムを、地域住民の健康づくりと関連させ、日本型のスポーツクラブをつくり、100年、200年後も愛され発展し続けるクラブを目指していくことが必要だと実感した。

今回の研修を通じて、自分の五感でドイツのスポーツシステムやクラブシステムを感じてきたことで、私のクラブに活用できる日本型クラブシステムの新しいヒントを学べたことに感謝します。



IV 派遣事務報告

「東日本大震災復興支援」 ～とどけよう スポーツの力を東北へ！～ 平成23年度クラブマネジメント指導者海外研修事業 派遣事務報告

派遣団総務：佐野 俊輔（日本体育協会スポーツ振興部クラブ支援課）

派遣準備（出発まで）

(1)派遣団員の募集・決定

○4月28日（木）

・都道府県体育協会に対し、派遣団員の募集通知を送付する。

○6月3日（金）

・派遣団員の募集を締め切り、結果、18都道府県体育協会より24名の推薦を受け付ける。

○6月13日（月）

・選考委員会において、以下3点の選考基準に基づき、派遣団員の選考を行った。

- ①日本体育協会公認マネジメント資格の保有者であること
- ②地域別（所属都道府県）のバランス（過去の派遣実績を含む）
- ③活動状況等

・第1回地域スポーツクラブ育成専門委員会において、13名の派遣団員が内定した。併せて、不測の事態に対応するため3名を補欠者とした。

また、派遣団団長に伊端隆康氏（総合型地域スポーツクラブ全国協議会副幹事長、るもいスポーツクラブ「このゆびとまれ」クラブマネージャー）を、派遣団総務に本会事務局より佐野俊輔（スポーツ振興部クラブ支援課）を決定した。

○6月21日（火）

・内定者13名、補欠者3名、非内定者8名、派遣団員の推薦があった18都道府県体育協会に対し、内定通知、非内定通知を送付した。

○8月18日（木）

・渡航にかかわる航空券・宿泊先・移動手段の手配業者を見積もり合わせにより選定。結果、トップツアー株式会社に依頼することに決定

した。

(2)事前研修会の開催

○8月1日（月）

・団長、内定者13名に対し、事前研修会の開催案内を送付した。

○9月2日（金）～3日（土）

岸記念体育会館内の理事・監事室において開催した。福島大学教授で本会地域スポーツクラブ育成専門委員会副委員長の黒須充氏から「ドイツのスポーツ振興、スポーツクラブについて」と題して講義いただき、昨年度の派遣団員である鈴木ゆかり氏（NPO法人よりづか☆ちよいスポ倶楽部理事長）、菊地正氏（NPO法人高津総合型地域スポーツクラブSELF副理事長）より、昨年度のドイツ研修報告を行っていただいた。渡航先でのプログラムを効率よく進めるために有意義な研修となった。

また、派遣日程、研修内容、役割分担、渡航に係る諸準備等についても確認を行った。

○9月13日（火）

・事前研修会を修了した内定者13名及び当該推薦都道府県体育協会に対し、派遣団員決定通知を送付した。

○4月～10月

・派遣に係る諸準備（土産品購入、派遣団メンバーリスト作成、関連書籍購入、傷害保険加入手続き、旅行代理店との打合せ等）
・ドイツでの受け入れ先であるライン・ノイス郡スポーツ相談課と日程、研修内容等についてその都度調整した。

【派遣期間（研修時）】

○10月17日（月）

【内容】最終打合せ・結団式

【宿泊先】成田ポートホテル

15時に岸記念体育会館に派遣団員が集合し、日程、役割分担、携行品等の最終確認を行い、引き続き結団式を行った。その後、ドイツでの訪問先において披露するべく、「よさこい」「さくらビクス」の練習を行った。

全員が「よさこい」「さくらビクス」を習得した後、16時40分に成田空港に向けて出発。17時50分に宿泊先である成田ポートホテルへ到着し、チェックイン。その後、夕食を取るためにインターナショナルガーデンホテル成田内レストランへ。無事に研修が終わることを祈って乾杯。翌朝の出発が早いことから、21時10分に成田ポートホテルへ戻った。

○10月18日（火）

【内容】ドイツ・グレーベンブロイヒへ向けて出発

（成田空港⇒フランクフルト空港⇒デュッセルドルフ空港）

【宿泊先】Hotel Sonderfeld

7時15分に成田ポートホテルを出発し、バスにて成田空港へ向かった。到着後はトップツアー株式会社の指示に従い搭乗手続きを行った。出国審査等を順調に済ませ、9時30分発ルフトハンザ航空711便にて経由地であるフランクフルト空港へ向けて出発。フランクフルト空港では、乗り継ぎまでの時間を空港内散策、写真撮影等各自で過ごし、現地時間16時40分発ルフトハンザ航空082便にてデュッセルドルフ空港へ向けて出発した。17時25分に到着後、空港にて本研修の受け入れを担当いただくアクセル・ベッカー氏（ライン・ノイス郡スポーツ相談課）と通訳の松尾喜文氏の出迎えを受けた。空港からはバスにて宿泊先であるHotel Sonderfeldへ向かった。ホテルへのチェックインを済ませ、夕食会場であるドイツ料理店へ。お待ちかねのドイツビール、ポリュームのある食事をいただき、ホテルへ戻った。成田ポート

ホテルを出発してから約22時間。ようやくの就寝となった。

○10月19日（水）

【内容】講義①②③・クラブ視察①

【宿泊先】Hotel Sonderfeld

いよいよ研修がスタート。この日からお世話になる通訳の多田茂氏と合流し、講義会場であるライン・ノイス郡庁舎に徒歩で向かった。10分程度で到着したが、各自がドイツの風景を写真に収めながらの移動となった。

研修前に予定されていた表敬訪問については、受け入れ先の事情によって翌日に変更となったため、早速、講義へと移った。

講義①では、フォルカー・リットナー氏（ケルンスポーツ大学特任教授）より「社会の発展とスポーツ」をテーマにドイツにおけるスポーツとスポーツクラブの役割について社会学的な分析のもとに講義いただいた。

続く講義②では、アクセル・ベッカー氏より「ライン・ノイス郡のスポーツ」をテーマに、ライン・ノイス郡におけるスポーツの現状とスポーツ振興について講義いただいた。

講義②終了後、庁舎近くの食堂にてランチミーティングを行い、次の講義が行われるコルシエンブロイヒへバスで移動した。元ビール工場であったという歴史を感じることが出来るコルシエンブロイヒ市スポーツ課事務所に着。講義③は、スポーツ課事務所において、ハンス・ペータ・バルター氏（コルシエンブロイヒ市スポーツ課長）より、行政からのスポーツクラブへの支援について講義が行われた。ここでは団員からの質問が特に飛び交い、バスを待機させながら、リミット直前まで質問を受け付けていただいた。その後、最初の視察クラブとなるコルシエンブロイヒシニア世代スポーツクラブへ移動。クラブハウスにおいて、シニア世代ならではの視点で行われる活動、取り組みについて説明いただいた。大きな手作りケーキと美味しいお茶をいただきながら、終始和やかな雰囲気であった。クラブ理事との懇談の中で、出発前に全員で練習した「よさこい」を初披露した。機械トラブルによりミュージックなしでの披

露となったが、クラブ理事の方にも法被をまもっていたいただき、共に楽しむことが出来た。「よさこい」効果で交流が深まった後、近隣の体育館へ移動し、ドイツボーリング「ケーゲル」を理事の方と楽しんだ。夕食を取りながらのケーゲルは、時間を忘れるほど盛り上がり、ホテルへ戻った時には22時近くになっていた。

○10月20日（木）

【内 容】 講義④⑤⑥・クラブ視察②③

【宿泊先】 Hotel Sonderfeld

研修2日目は、団員の緊張も取れた様子でリラックスした雰囲気の中、講義会場であるライン・ノイス郡庁舎に向かうことが出来た。

講義前に、当初、前日の19日に予定されていた表敬訪問において、シュタイン・メッツ氏（ライン・ノイス郡副郡長）、トーマス・ラング氏（ライン・ノイス郡スポーツ連盟理事長）、相馬安行氏（在デュッセルドルフ日本総領事館首席領事）の3名からそれぞれ歓迎のごあいさつをいただいた。その後、ライン・ノイス郡から東日本大震災の被災地へ、義援金の贈呈セレモニーが行われた。我々日本団が訪問することを聞き、日本団の訪問時に贈呈セレモニーを開催する運びとなったとのことであった。非常に光栄な場に立ち会うことが出来た。

講義④では、アクセル・ベッカー氏より「スポーツクラブの健康志向コース」をテーマに、最近のスポーツクラブにおける健康志向プログラムの動向について講義いただいた。

続く講義⑤では、ギーゼラ・フーク女史（ライン・ノイス郡学校スポーツ委員会事務局長）より、「スポーツクラブと小学校の連携」をテーマに、ドイツにおける教育制度の変化に伴うスポーツクラブにとっての問題点や対応、スポーツクラブと小学校が連携することのメリットについて講義いただいた。

研修初日と同じ食堂でランチミーティングを行った後、2つ目の視察クラブであるTUSグレーベンプロイヒへ徒歩で向かった。2011年に創立100周年を迎える歴史あるクラブであり、クラブハウスにはクラブのシンボルマーク、他クラブの

ペナント等が多くあり、思い描いていた光景を目の当たりにすることが出来た。陸上トラックやサッカーグラウンド等多くの施設がクラブハウスに面しており、施設見学を交えながらクラブにおける活動について説明いただいた。

その後、一旦ホテルへと戻り、ホテル近くにあるオルケン体操クラブを訪問した。オルケン体操クラブも創立100年を超える歴史あるクラブであり、趣のあるクラブハウス、体育館等の施設を見学させていただいた。施設見学時、幾つかのスポーツ教室が行われており、教室風景も見学することが出来た。小学生くらいの女の子達が楽しそうに体操を行っている姿がとても印象的であった。一通りの説明を受けた後は、クラブ理事の方々と夕食懇親会が行われた。「クラブハウスにてビールを飲みながら交流を深める」といった話に聞いていた“クラブライフ”を体験することが出来た。ここでは、クラブ理事の方々から歌のプレゼントをいただいたお礼として、本研修2回目の「よさこい」「さくらビクス」を披露した。今回はミュージックも流すことが出来、クラブ理事の方々と交流を深めることが出来た。クラブがホテルから近かったこともあり、ホテルへは23時の到着となった。

○10月21日（金）

【内 容】 講義⑦・クラブ視察④⑤

【宿泊先】 Hotel Sonderfeld

4つ目の視察クラブであるTSVバイヤードルマーゲンを訪問するために、バスにてドルマーゲンへ向かった。製薬会社のBAYERがスポンサーであり、広大な敷地にプール、屋内陸上競技場、ハンドボール場等多くの施設を抱えており、充実した環境に圧倒させられた。その広大な敷地にある各施設をアクセル・ヴェルツ氏に案内いただき、その後、同氏とハンス・ペータ・ケーニツヒ氏にクラブと学校の連携、タレント発掘といったトップ選手の育成方法等クラブの取り組みについて説明いただいた。クラブ内のレストランにおいて昼食をとり、5つ目の視察クラブであるBVヴェックホーフェンがあるノイス市へバスにて向かった。

BVヴェックホーフエンでは、レンガ造りのクラブハウスにて、大きなケーキとコーヒーをいただきながら、クラブの様々な取り組みについて説明いただいた。国籍を越えてスポーツに取り組むといった目標を持っていること、ボランティアへの意識付けをするために子ども達をロンドンオリンピックへ連れて行くといった、特徴的な取り組みについて話を聞くことが出来た。

バスにてホテルに戻った後、本研修をコーディネートしていただいたお礼として、日本派遣団主催による答礼夕食会を開催した。夕食会には、ベッカー氏をはじめリットナー氏等講師の方々、通訳の多田氏、松尾氏にもご出席いただき、本研修に対するお礼を申し上げた。夕食会の最後には、ベッカー氏、リットナー氏から研修の修了証を各団員にいただき、大きな思い出となった。

○10月22日(土)

【内容】ケルンスポーツ大学見学・ケルン市内見学

【宿泊先】Madison Hotel Düsseldorf

翌日の帰国に備え、宿泊先をデュッセルドルフ空港付近へと移すため、荷物をまとめてからの出発となった。前日までお世話になった通訳の多田氏とはここでお別れとなった。研修におけるご協力に対して感謝申し上げた。

バスにてケルンスポーツ大学へ移動。到着後、広大な敷地内を同大学の卒業生でもあるベッカー氏に案内いただいた。施設見学後、大学内の中央図書館にてリットナー氏よりケルンスポーツ大学の概要について説明いただき、スタッフの方には図書館内を案内いただいた。

ケルンスポーツ大学の見学を終えたところで、ドイツ到着後からこの日までずっとお世話になったベッカー氏とお別れとなった。団員それぞれが別れを惜しみつつ、感謝の意を伝えた。

バスにてケルン市内中心部へと移動し、昼食を取った後、2時間半程度自由行動とした。ケルン大聖堂の見学、ショッピング等、団員それぞれが

思い思いに自由時間を楽しんだ。

再度集合した後、ケルン市を後にし、宿泊先のあるデュッセルドルフへバスにて移動した。ホテルへチェックインした後、夕食を取るためにレストランへ。ドイツでの最後の夜を楽しんだ。夕食後、通訳の松尾氏とお別れとなり、本研修におけるご協力に対して感謝申し上げた。

○10月23日(日)

【内容】日本・成田空港へ向けて出発

(デュッセルドルフ空港⇒フランクフルト空港⇒成田空港)

帰国のため、トップツアー株式会社現地スタッフとともにホテルを出発し、バスにてデュッセルドルフ空港へ向かった。空港では、現地スタッフの案内の元、各自で搭乗手続きを行った。空港スタッフの協力もあり、スムーズに手続きを終えることが出来た。

ドイツ滞在期間中、天候にも恵まれ、大きなトラブルはなかったが、最後にトラブルに遭遇することになる。10時20分発ルフトハンザ航空077便にてフランクフルト空港へ向かうために、搭乗ゲートで待機していたが、全く出発する気配がない。結果、1時間以上遅れての離陸となった。フランクフルト空港到着後、乗継便の出発まで1時間程度あったが、空港が混雑していたこともあり出国審査に時間を要し、出発15分前に搭乗ゲートに辿り着くこととなった。何とか乗り遅れることなく、13時40分発ルフトハンザ航空710便にて成田空港へ向かうことが出来た。

○10月24日(月)

【内容】成田空港到着・解散

日本時間7時45分に成田空港に到着。タイトなスケジュール、長時間の移動により、団員からは疲れた表情が窺えたが、全ての団員が元気で無事に帰国することが出来た。

最後に、到着ゲートにて伊端団長よりあいさつがあり、研修の全日程が終了。解散となった。

10月17日



結団式にて



夕食の様子

10月18日



フランクフルト空港にて



研修の成功を祈って乾杯



夕食会場（ドイツ料理店）

10月19日



ライン・ノイス郡庁舎までの移動風景



みんなで昼食



コルシェンブロイヒ市スポーツ課事務所

10月19日



クラブハウス (シニア世代スポーツクラブ)



よさこい披露 (シニア世代スポーツクラブにて)



ケーゲルを体験



ケーゲル場での夕食

10月20日



ライン・ノイス郡庁舎



宿泊したホテル (Hotel Sonderfeld)



講義風景



義援金贈呈セレモニー

10月20日



クラブハウス (TUSグレーベンプロイヒ)



TUSグレーベンプロイヒでの活動風景



クラブハウス (オルケン体操クラブ)



オルケン体操クラブでの活動風景

10月21日



ハンドボール場 (TSVバイヤードルマーゲン)



TSVバイヤードルマーゲンでの活動風景



クラブハウス (BVヴェックホーフェン)



講義風景 (TSVバイヤードルマーゲン)



視察風景 (BVヴェックホーフェン)

10月21日



答礼夕食会



修了証授与

10月22日



ケルンスポーツ大学見学



中央図書館での講義 (ケルンスポーツ大学)



活動風景 (ケルンスポーツ大学)



ケルンスポーツ大学体操場



ケルンスポーツ大学サッカー場

10月23日



フランクフルト空港にて



成田空港到着

平成23年度 公益財団法人日本体育協会
クラブマネジメント指導者海外研修事業
報告書

発行日 平成24年3月26日
発行 公益財団法人日本体育協会
〒150-8050
東京都渋谷区神南1-1-1
岸記念体育会館
TEL 03-3481-2278・2280
印刷 ホクエツ印刷株式会社

スポーツは、なぜ楽しいのか。
スポーツは、なぜ気持ちいいのか。
スポーツは、なぜ夢中にさせるのか。
スポーツは、なぜ感動を呼ぶのか。

ただ勝利することだけが成功であり、喜びであるなら、
人々は、これほどまでスポーツを必要とはしないはず。
強くなること、うまくなることだけが、目的であるなら、
人々は、これほどまでスポーツに打ち込んだりしないはず。

スポーツは一人ではできない。
いっしょに切磋琢磨する仲間がいる。
同じ目標に向かってしのぎを削り合う対戦相手がいる。
そして、審判や応援してくれる人達、
さらには環境を整えてくれる人達も欠かせない存在だ。

スポーツをする。試合をする。
そこには、自分自身の努力がある。
チームメイトと築いた信頼がある。
対戦相手への敬意がある。
支えてくれる人達への感謝がある。

これらは人格をつくることにおいて、なくてはならないとても大切なものだ。
そして、これらこそが、フェアプレイの真ん中にあるものだと、私たちは考える。
スポーツが楽しく、感動を呼び、気持ちよく、夢中にさせるのも、
このフェアプレイの気持ちがあるからこそだ。

私たち日本体育協会は、
すべてのスポーツにおいてフェアプレイを浸透させ、
実践させる活動に力を注いでまいります。
フェアプレイは、子供や若者を成長させます。
彼らのまわりの人、彼らの住む地域を活気づけます。
そして、きっと、日本を元気にする力になれると信じています。

フェアプレイで
日本を元気に

あくしゅ、あいさつ、ありがとう



みんなでスポーツを!

SPORTS
for all

わたしたちは、「フェアプレイで日本を元気に」キャンペーンを応援しています。



<http://www.japan-sports.or.jp/> 公益財団法人 日本体育協会



「フェアプレイで日本を元気に」
ホームページ開設!



アクセスして、ぜひ「フェアプレイ宣言」をしてください。

フェアプレイ体協

検索